



大学教育再生加速プログラム

平成 2 7 年度報告書

大学教育再生加速プログラム(AP)

[テーマ I・II 複合型]



宮崎国際大学
Miyazaki International College

目次

I. はじめに	
－AP 事業への取り組みについて－	1
II. 平成 27 年度 AP 事業全体の概要.....	3
1. 平成 27 年度 AP 事業の目的	3
2. 平成 27 年度 AP 事業実績と具体的な成果.....	3
III. 平成 27 年度活動報告.....	10
1. アクティブ・ラーニング・シンポジウム	10
2. WG の活動.....	21
(1) e ポートフォリオWG	21
(2) ルーブリック・ベース・シラバスWG	29
(3) クリティカル・シンキングWG	44
IV. 平成 27 年度外部評価委員会	52
1. 外部評価委員会 日程	52
2. 外部評価委員会議事録.....	53
3. 外部評価委員長の総括.....	58
V. AP 事業と宮崎国際大学の展望.....	61
VI. 参考資料	62
1. Newsletter (英語版)	62
2. 宮崎国際大学 AP プロジェクト・メンバー	66

I. はじめに



—AP 事業への取り組みについて—

宮崎国際大学副学長 Benjamin A. Peters

Miyazaki International College (MIC) continues to make progress toward its AP Project goals of improving Active Learning (Theme I) and the Visualization of Learning Outcomes (Theme II). Achieving these goals will strengthen the college, and we hope that the research outcomes and education reforms that result from our project will also be useful to the Japanese higher education community. Of course, we are also eager to learn about the result of other universities' AP Project achievements.

The AP Project research and reforms at MIC are faculty-driven, and in the 2015-2016 academic year, faculty members actively participated in the AP Working Groups. Nearly half of the college faculty, including members of both the School of International Liberal Arts and the School of Education, are AP Working Group members. Their research and classroom implementation of reform projects are steadily propelling the project forward. Thanks to the active involvement of the faculty, students are already benefiting from the project.

In 2015-2016, the Active Learning Working Group (ALWG) conducted class observations and instructor interviews, held two FD seminars on best practices in Active Learning on campus, and played the central role in hosting our Active Learning Symposium in November 2015. In addition, one ALWG member participated in a training session in the U.S. for the Critical Thinking Assessment Test (CAT). The Critical Thinking Working Group administered the CAT twice on campus during the 2015-2016 academic year, and faculty volunteers participated in assessment sessions following each administration of the CAT. CTWG also held an FD workshop on the CAT results and on recommendations for incorporating what we have learned from the test into classroom practices.

Working groups also made progress toward Visualization of Learning Outcomes. In particular, the e-Portfolio Work Group (ePWG) successfully introduced the e-Portfolio system for student-driven Mahara input and facilitation of output into Moodle for rubric-based assessment by students (self-assessment) and instructors. The Rubric-Based Syllabus Working Group (RBSWG) contributed to the success of the project through establishment and introduction of the college-wide rubric, digital and live FD seminars, and surveys of rubric usage.

Since the establishment of the college, MIC has been dedicated to teaching critical thinking through active learning and helping students to become independent learners and global citizens. The AP Project is helping us achieve those goals and set new standards for improvement. Two of the benefits of the AP Project at a small college like ours are wide faculty participation in the project and the ability to carry out reforms that have immediate effects for all of our students.

Ⅱ. 平成 27 年度 AP 事業全体の概要

1. 平成 27 年度 AP 事業の目的

本事業の本年度の目的は、主に 3 つある。1 つ目は、平成 26 年度に実施したアクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスの明確化のための協議事項に基づいて、アクティブ・ラーニング実践のための体系的な実施プログラムを確立させることである。特にタブレット端末を用いた ICT を導入したアクティブ・ラーニングの実施については、より効果的な実施方法についての開発を進め、その事業成果をシンポジウムで報告する。2 つ目は、クリティカル・シンキングのアセスメントを本格的に実施・運用していくことである。平成 26 年度に立案・準備した企画内容を基にクリティカル・シンキング・アセスメントテスト（CAT）の学生への実施とアセスメント成果についての分析と検討を行う。3 つ目は、e-ポートフォリオの本格的運用の開始である。平成 26 年度に整備したシステムを基に e-ポートフォリオセンターを開設し、e-ポートフォリオの管理・運営を進める。

2. 平成 27 年度 AP 事業実績と具体的な成果

日程	実績	具体的な成果
4 月	e-ポートフォリオセンターの設置と管理運営を開始する。	
	e-ポートフォリオセンターを設置し、アセスメント・オフィサー（平成 27 年 3 月採用）と事務補佐員（平成 26 年 12 月採用）を配置した。e-ポートフォリオ(Mahara)に関しては e-ポートフォリオ・ワーキンググループと協働しながら管理運営を行った。また、アセスメント・オフィサーと事務補佐員は、e-ポートフォリオ関連業務だけでなく、本学におけるタブレット PC の貸与とその管理を担当した。	アセスメント・オフィサーと事務補佐員で構成される e-ポートフォリオセンターは、AP 事業全般の管理運営をそれぞれのワーキンググループと連携しながら行っており、AP 事務局としても機能している。平成 27 年度は、特に e-ポートフォリオのプラットフォームとなるタブレット PC の購入、セットアップ、管理、学生への貸与、諸オリエンテーションの実施において重要な役割を担った。タブレット PC の学生への貸与にあたっては、機器管理や使用方法に関するオリエンテーションを実施し、その後ヘルプセンターとして学生の相談に対応している。また、e-ポ

		トフォリオの中核ソフトである Mahara については、e-ポートフォリオワーキンググループと協働し、複数のオリエンテーションを実施したことで、学生に Mahara の利用方法を周知した。
4 月	e-ポートフォリオについてのワークショップを開催する。	
	4 月 23 日に教職員向けの e-ポートフォリオ・ワークショップを開催し、e-ポートフォリオに関する教職員の理解と知識を深めた。また、5 月 28 日・29 日には e-ポートフォリオの国際学会である iMoot#15 を e-ポートフォリオセンターで本学教職員がオンラインで視聴し、e-ポートフォリオに対する理解をいっそう深めた。また、9 月 28 日、11 月 5 日、平成 28 年 1 月 28 日にも教職員向けワークショップを開催した。	前述の通り、e-ポートフォリオシステムの構築が遅れたことから、4 月の教職員向けワークショップは、Mahara と Moodle の大まかな説明で終わった。その後システム導入後、左記の通り、9 月、11 月、本年 1 月にもワークショップを開催し、教職員の e-ポートフォリオに関する理解の促進を図った。教員に Mahara の教育的利用法を理解させ、その利用の喚起を図った結果、徐々にではあるが、授業における Mahara と Moodle の利用が増え、学生により良いアクティブ・ラーニングの環境を提供することができた。
4 月～5 月	平成 27 年度入学生にタブレット端末を配布する。	
	当初の想定時期より納品が大幅に遅れ、7 月に平成 27 年度入学生に貸与した。7 月 21 日・23 日・24 日に貸与にあたってオリエンテーションを開催し、学生が効果的にタブレットを使用できるよう、アセスメント・オフィサーと事務補佐員が指導にあたった。	タブレット PC の貸与時期は遅れたものの、貸与を受けた学生は、8 月から 9 月までの夏季休業期間でその使い方を理解し、10 月からの後期で授業内での利用のほか、自学自習、課題、e-ポートフォリオの作成等でタブレット PC を活用している。
4 月～5 月	CAT の日本語版を作成する。	
	CAT の著作権を持つ米国テネシー工科大学と交渉したところ、CAT の日本語版を作成することはテネシー工科大学の方針で難しいことがわかった。したがって、テネシー工科大学が作成する CAT とは異なる、本学独自の CAT (MICCAT) の作成を直ちにを行うこととした。	CAT の日本語版作成はできなくなったものの、CAT を実施したことで得た知見（学内での成績評価、テネシー工科大学からの成績分析結果報告書に基づく）は、今後本学独自のクリティカル・シンキングテスト作成において貴重な資料となっている。

4月～ 9月	ループリック評価システム（アクティブ・ラーニング、英語スキル、クリティカル・シンキング）の構築。	
	<p>本学教職員から構成されるループリック・ベース・シラバス・ワーキンググループ（RBSWG）によって、日英バイリンガルの環境下にある本学に相応しいループリックの研究が進められ、9月30日にRBSWG主催のFDを行った。</p>	<p>英語スキルの伸長度そのものを測るループリックについては、英語科の教員により既に作られ運用されているが、アクティブ・ラーニング、クリティカル・シンキングについてはまだ研究中である。ループリック・ベース・シラバス・ワーキンググループが行ったFDは、Institutional Rubric（インスティテューショナル・ループリック/大学共通ループリック）に関したものであり、当該FDでは、本学のカリキュラム全般を通して学生に身につけてもらいたい評価項目を整理したループリックについての説明が行われ、議論された。インスティテューショナル・ループリックは、現在国際教養学部ではシラバス配布時に学生に示され、学生の諸能力育成における指針となっている。今後その効果的活用が課題である。</p>
5月	前期CATテストを実施する。	
	<p>当初の予定より遅れたが、7月31日にCATテストを本学学生に実施した。テストは本学教員によって採点され、採点した答案はCATテストを開発・管理している米国テネシー工科大学に送付された。その後、テネシー工科大学よりその分析レポートが届いた。</p>	<p>テネシー工科大学の分析レポートにより、英語で作成されているオリジナルのCATテストは、英語力がかなり高い学生でないと蓄積されたデータとの照合が出来ず、本学の学生全般のクリティカル・シンキング力を測る尺度とはならないことが判明した。ただし、本学の教員が行った答案の評価及びテネシー工科大学の分析レポートは、本学独自のクリティカル・シンキングテストを作成するにあたり、多くの貴重な情報を提供してくれた。</p>
5月	アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する教員研修を行う。	
	<p>5月28日にアクティブ・ラーニング・ワーキンググループ（ALWG）が主催するアクティブ・ラーニングに関するFDを実施した。このFDでは、国際教養学部の4人の教員が、それぞれ</p>	<p>実際の授業で行われている多様なアクティブ・ラーニングの手法を教員間で共有し、また、互いにその特徴について議論したことで、教員間に効果的アクティブ・ラーニングに対する考えがより鮮明とな</p>

	れが効果的と考える自身のアクティブ・ラーニングの授業法を発表し、その後活発な議論がなされた。	り、授業の改善に寄与した。ベストプラクティスの体系化に向けた活動の推進に寄与する FD となった。
6 月	CAT の会員登録を更新する。	
	クリティカル・シンキングワーキンググループ (CTWG) により、CAT の会員登録が更新された。	本学独自のクリティカル・シンキングテスト作成という目的達成のため、本年度も CAT を利用しそのデータを収集するとともに、そこに含まれている評価基準を参考に、クリティカル・シンキングを育む授業法について検討がなされた。
7 月～ 8 月	CAT 開発に関わる研修会への参加と実施調査を行う。	
	8 月 3 日から 7 日まで、グレゴリー・ダン教授を米国カリフォルニア州サンディエゴで開催された、テネシー工科大学主催の CAT のトレーニングに派遣した。同トレーニングにおいて CAT に関する情報を収集し、帰国後、得られた知識の学内での共有化に努めた。	アクティブ・ラーニングワーキンググループのリーダーであるグレゴリー・ダン教授を CAT の研修会に派遣し、クリティカル・シンキング測定に係る知見を持ってもらうことで、クリティカル・シンキングを育むためのアクティブ・ラーニングのベストプラクティスを模索するという視点をより一層明確にすることができた。
10 月	アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する第 1 回のシンポジウムを開催する。	
	11 月 28 日に「2015 アクティブ・ラーニングシンポジウム」を、学内外から多数の参加者を得て開催した。内容としては、「アクティブ・ラーニングの可視化：将来への展望」(担当：アン・ハワード准教授、カタリーナ・モーク講師) と「アクティブ・ラーニングによるクリティカル・シンキング能力の開発」(担当：グレゴリー・ダン教授、ベンジャミン・ピーターズ教授) の二つの研究発表が本学教員 4 名により行われ、会場からは熱心な質疑応答があった。また、「アクティブ・ラーニングワークショップ」も行われ、「アクティブ・ラーニングとタブレット PC」(担当：ジェニース・ラスク准教授)、「ア	各ワーキンググループが取り組んできたことを、アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキングを中心に学内外の参加者に発表した。学外参加者の中には本学と同様の AP 事業(複合型)やタイプ 1 に取り組んでいる大学関係者も複数おり、シンポジウム前後での意見交換もあるなど、本学の AP 事業の他高等教育機関への発信、波及という点では一定の効果があったものとする。大学関係者も含め、参加者からは概ね肯定的な評価をいただき、その後の活動に大きな弾みをつけることができた。

	クティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング」(担当:モニカ・ハムチュク講師)、「アクティブ・ラーニングと e ポートフォリオ」(担当:デボラ・オチ教授)の三つの分科会を本学教員 3 名が講師となって行った。	
10 月	CAT の活用ワークショップを行う。	
	「2015 アクティブ・ラーニングシンポジウム」の中の「アクティブ・ラーニングワークショップ」で、CTWG が CAT の活用ワークショップを開催した。	CAT が測定するクリティカル・シンキング力とはどういったものを説明した上で、それを育むアクティブ・ラーニングの手法について参加者とともに考え、その具体的方法を実践することで、参加者のクリティカル・シンキングとアクティブ・ラーニングの関連性に関する理解の推進を図った。時間的制約があるなか、十分でないものの、一定の成果はあったものと考ええる。
10 月 ～2 月	ルーブリック評価システムの試行。	
	9 月 30 日と翌年 3 月 6 日に、ルーブリック・ベース・シラバスワーキンググループ(RBSWG)による FD を開催し、本学教員のルーブリックに関する知識を深めた。特に、各教員が今後シラバスにルーブリックを導入するにあたっての疑問点・注意点などについて議論が行われた。	ルーブリック・ベース・シラバスに含まれるルーブリック評価内容、その利用法、記載方法等について議論がなされ、まずは国際教養学部における、Institutional Rubric (インスティテューショナル・ルーブリック/大学共通ルーブリック)の試験的導入が後期(10 月開始)から始まった。その後 3 月の FD でその実践的応用例が数例示され、教員にその効果的利用の推進を啓発した。ルーブリック・ベース・シラバスの導入により、学生は授業から何を得るべきかを事前に知ることとなり、授業に一定の目標を持って取り組むことができるようになった。
11 月 ～1 月	アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティス明確化のための教員相互授業参観と協議会を開催する。	
	11 月から 1 月にかけて ALWG の教員メンバーが 15 のクラス(授業)を参観した。また、各クラス担当の教	アクティブ・ラーニングのベストプラクティスを模索するには、まずは長年培ってきた国際教養学部の教員のアクティ

	員にもインタビューを行った。さらに、教員間で相互授業参観も行った。そして、「2015 アクティブ・ラーニングシンポジウム」で研究発表した際に得られたフィードバックも踏まえて ALWG のミーティング（協議会）を開催し、議論を行った。	ブ・ラーニング授業法の実態を把握し、その類型化、体系化をする必要がある。ALWG の教員メンバーによる授業参観とその後の授業担当教員に対する聞き取り調査は、その後の国際教養学部に所属する全教員に対するアンケートの実施とともに、アクティブ・ラーニングのベストプラクティスとは何かを理解するための有効なデータを提供することとなった。また、授業参観結果は他の教員にもフィードバックされ、授業全体の改善にも資することとなった。
11 月	後期 CAT を実施する。	
	当初の予定より遅れ、52 人に対し、2 月 5 日に実施した。	本学教員により採点された CAT の答えは 3 月にテネシー工科大学へ送られたため、その成績分析結果報告書はまだ出ておらず、本報告書記載時点ではその成果には言及できない。
2 月	アクティブ・ラーニングカンファレンスへ参加する。	
	2 月 5 日および 6 日にグレゴリー・ダン教授が米国バージニア州の高等教育研究に関するカンファレンスに参加し、情報収集を行った。	アメリカでは高等教育においてアクティブ・ラーニングの研究、実践が広く行われており、今回の本学教員の学会参加は、本学が目的とするアクティブ・ラーニングのベストプラクティスの定義、その具体的実践に係る多くの有益な知見が得られたことで、意義のあるものとなった。
3 月	平成 27 年の年次報告を行い、外部評価委員会による評価を受ける。	
	平成 27 年度の AP 事業の進捗状況と成果を主とした年次報告を、平成 28 年 3 月 25 日に IR 推進委員会に対して行った。また、平成 28 年 3 月 30 日に「平成 27 年度宮崎国際大学 AP 外部評価委員会」を開催し、本学の AP 事業全般に関して、初めて外部評価を受けた。ちなみに、外部評価委員会は、学外の有識者 3 名（堀和郎宮崎太陽銀行非常勤理事・筑波大学名誉教授、藤	外部評価委員会の構成を、アクティブ・ラーニングを研究課題としている大学教員 2 人、現在アクティブ・ラーニング、クリティカル・シンキングを基調とした授業を受けている学生 1 人、その成果を持って社会で、かつ教育現場で活躍する卒業生 1 人、そして、大学教育を実践した後企業に身を置き、その管理運営に携わる社会人 1 人、としたことは、高等教育の質の保証を目的とした AP 事業の趣旨にかんがみ、

	<p>墳智一宮崎大学准教授、林透山口大学准教授)、本学の卒業生 1 名 (現高校英語教諭)、本学在学学生 1 名で構成された。</p>	<p>適切であったと考える。本学側からの AP 事業の趣旨、目的、そして進捗状況等に関する説明に対し、外部評価委員からは活発な質問と意見があり、会はその主旨に沿い、本事業の PDCA を適切に行うという観点からみて、成功裏に終わったものと考ええる。評価委員会からの報告書は、開催時期が遅かったため、年度を越えての提出となるため、その具体的成果については、現時点では言及できない。</p>
--	---	---

Ⅲ. 平成 27 年度活動報告

1. アクティブ・ラーニング・シンポジウム

(1) プログラム

平成 27 年 11 月 28 日に宮崎国際大学において、「2015 アクティブ・ラーニングシンポジウム」を、学内外から多数の参加者を得て以下の内容で開催した。

I. 「アクティブ・ラーニングの可視化：将来への展望」

(担当：アン・ハワード准教授、カタリーナ・モーク講師)

II. 「アクティブ・ラーニングによるクリティカル・シンキング能力の開発」

(担当：グレゴリー・ダン教授、ベンジャミン・ピーターズ教授)

III. アクティブ・ラーニングワークショップ

「アクティブ・ラーニングとタブレット PC」

(担当：ジェニース・ラスク准教授)

「アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング」

(担当：モニカ・ハムチュク講師)

「アクティブ・ラーニングと e ポートフォリオ」

(担当：デボラ・オチ教授)



大学教育再生加速プログラム

 宮崎国際大学

2015 アクティブ・ラーニング シンポジウム

Miyazaki International College
Active Learning Symposium 2015

2015年11月28日(土)

平成26年度文部科学省大学改革推進事業
大学教育再生加速プログラム (AP)
〈テーマ〉Ⅰ・Ⅱ 複合型



大学教育再生加速プログラム

平成27年11月28日(土)実施

宮崎国際大学
大学教育再生加速プログラム(AP)

MIYAZAKI INTERNATIONAL COLLEGE
Acceleration Program for University Education Rebuilding (AP)

2015 アクティブ・ラーニング シンポジウム
ACTIVE LEARNING SYMPOSIUM 2015

Program

■ 午前の部 Morning Session

司会: APアセスメント・オフィサー 横原知行
MC: AP Assessment Officer Tomoyuki Yokohara

9:30 受付開始 Reception

10:00 開会のあいさつ

Opening Remarks

学長 永田雅輝
President Masateru Nagata



本シンポジウムの意義

Significance of this Symposium

副学長 ベンジャミン・ピーターズ
Vice President Benjamin A. Peters



10:30~11:45 アクティブ・ラーニングの可視化：将来への展望
Active Learning Documentation: The Way Forward

発表者: アン・ハワード 准教授、カタリーナ・モーク 講師
Presenter: Associate Prof. Anne Howard; Lecturer Cathrine-Mette Mork
通訳: 笠井 綾 講師 Interpreter: Lecturer Aya Kasai



本発表では、AP事業におけるアクティブ・ラーニングワーキンググループのこれまでの活動の進捗状況とともに、アクティブ・ラーニングをさらに推進するために同グループによって進行中のアクティブ・ラーニングの手法の指標作成と、その分類化を目指すプロジェクトについて説明がなされます。このプロジェクトでは、ワーキンググループメンバーによる授業参観、インタビュー、アンケートを通じて収集された多くのアクティブ・ラーニングの手法を、一つのマトリックスを使って分類し、分析が行われます。このマトリックスの内容、また、そこから得られた初期段階の結果を本発表で公開します。

This presentation explains progress thus far from the Active Learning Working Group at MIC. The presenters will describe an ongoing project to index and categorize teaching strategies used by instructors to encourage active learning. The members of the working group have been collecting these strategies through observations, interviews, and surveys, and have designed a matrix to categorize them. This matrix will be explained and some preliminary results will be shared.

ディスカッサント: 宮崎大学教育・学生支援センター 藤埴智一 准教授
Discussant: Associate Prof. Tomokazu Fujitsuka Center for Education & Student Support, University of Miyazaki

11:45~12:00 質疑応答 Q and A

会場にてAP事業ワーキンググループの活動報告をポスター展示で行っています

午後の部 Afternoon Session

13:00~14:15

アクティブ・ラーニングによるクリティカル・シンキング能力の開発

Developing Critical Thinking Through Active Learning

発表者: グレゴリー・ダン 教授、ベンジャミン・ピーターズ 教授

Presenter: Prof. Gregory Dunne; Prof. Benjamin A. Peters

通訳: 池田祐実子 Interpreter: Yumiko Ikeda



アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング・スキル開発の関連性に焦点を当てたパネル・プレゼンテーションが行われます。はじめに、テネシー工科大学により開発されたクリティカル・シンキング・テスト(CAT)が紹介され、授業におけるアクティブ・ラーニングを通してクリティカル・シンキングを育成するという課題において同テストが果たし得る役割について説明がなされます。その後、発表者は、それぞれの専門分野である文学及び政治学において自らが考案した特定のクリティカル・シンキング能力の開発を目指した教授法を紹介し、次に、そこで育成された能力が、授業を越えて実社会における課題解決の諸場面にどのように活用されるかについて議論を行います。

This panel presentation will focus on the linkage between active learning and the development of critical thinking skills. The panel will include an introduction to the Critical Thinking Test (CAT) developed by Tennessee Technological University and its connection to teaching critical thinking through active learning in the classroom. The speakers will introduce classroom activities that they have designed in order to target the development of specific critical thinking skills in their respective fields, literature and political science, and will discuss the application of these skills beyond the classroom in real-world problem solving situations.

ディスカッサント: 藤塚智一 准教授 Discussant: Associate Prof. Tomokazu Fujitsuka

14:15~14:30

質疑応答 Q and A

14:30~14:45

休憩 Break

14:45~16:00

アクティブ・ラーニング ワークショップ Active Learning Workshop

A. アクティブ・ラーニングとタブレットPC

Active Learning and Tablet PCs

担当: ジェニース・ラスク 准教授

Instructor: Associate Prof. Jeniece Lusk



この参加型ワークショップでは、参加者は、タブレットPCの利用を学習活動の一部とする授業に参加し、実際に言語と教科内容の理解に関する課題に取り組めます。授業は、リーディング、メディア及びタブレットの利用等の要素を含み、展開されます。

This hands-on workshop will allow participants to participate in an actual language and content assignment integrating tablet use into the classroom. The lesson will incorporate reading, media, and tablet use.

B. アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング

Active Learning and Critical Thinking

担当: モニカ・ハムチュック 講師

Instructor: Lecturer Monica Hamciuc



このワークショップでは、CATテストにより評価されるクリティカル・シンキング能力の概要を説明し、その後、これらの能力に力点を置いた、その向上を主眼とする授業法の開発に係る幾つかの実例を紹介いたします。また、参加者には、それぞれが置かれた環境におけるクリティカル・シンキング能力の向上に資する活動についてブレインストーミングする機会が提供されます。

The workshop will give a brief overview of CT skills assessed by the CAT test and will demonstrate examples of how classroom activities can be developed to emphasize & practice some of these skills. Participants will also have a chance to brainstorm ideas for activities that could help enhance CT skills in their own unique environment.

C. アクティブ・ラーニングとeポートフォリオ

Active Learning and e-Portfolios

担当: デボラ・オチ 教授

Instructor: Prof. Debra Occhi



このワークショップでは、参加者に模範のポートフォリオページを自ら作成してもらい、eポートフォリオとアクティブ・ラーニング及び教育的実践との関係性について考察してもらいます。

This workshop allows participants to create a model portfolio page and consider its relationship to Active Learning and pedagogical practice.

16:10~16:30

総括及び閉会 Conclusion and Farewell Address

学長補佐/APプロジェクト・リーダー 西村直樹 Assistant to the President / AP Project Leader Naoki Nishimura

Posters exhibiting the work of each AP project Working Group are displayed in the hallway.

(2) 「アクティブ・ラーニングの可視化：将来への展望」

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Active Learning Working Group
アクティブ ラーニング ワーキング グループ

発表者：Dr. Anne McLellan Howard
Cathrine-Mette Mork

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

What is active learning?

[S]tudents must do more than just listen: they must read, write, discuss, or be engaged in solving problems. Most important, to be actively involved, students must engage in such higher-order thinking tasks as analysis, synthesis, and evaluation.

アクティブラーニングとは？
学生は、傾聴するだけでなく、読解したり、記述したり、問題解決のために討論したりする。最も重要なことは、分析、統合、評価などを通して、より高度な思考タスクに積極的に取り組むこと。

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

What is active learning?

Within this context, it is proposed that strategies promoting active learning be defined as instructional activities involving students in doing things and thinking about what they are doing (Bonwell & James 1991).

アクティブラーニングとは？
この文脈においては、アクティブラーニングを促進する手法とは、学生が何かを行うこと、また自分たちが行っていることについて考えることを促す教授方法である。(Bonwell & James 1991).

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Research questions

- What are preferred active learning strategies at MIC?

研究課題

- MICで積極的に導入されているアクティブラーニングの教授方法は？

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Research questions

- What is the connection between active learning and critical thinking?

研究課題

- アクティブラーニングと批判的思考の関係は？

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Research questions

- What is the connection between active learning and discipline?

研究課題

- アクティブラーニングと各教科の関係

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Categorization of AL Teaching Strategies

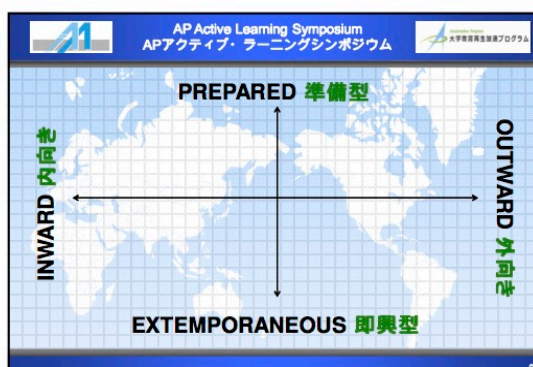
1) **OUTWARD** - interpersonal strategies involving communicative involvement with others
外向き — 他者と供に行う学習活動

2) **INWARD** - intrapersonal strategies involving reflective, mostly written, mostly individual work
内向き — 思索や記述など、主に個人的に行う学習活動

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

3) **PREPARED** - strategies allotted longer preparation or rehearsal time and involving presenting to an audience and/or submitting work
準備型 — 事前に準備をしておく学習活動

4) **EXTEMPORANEOUS** - strategies that are more impromptu, often in pairs or small groups
即興型 — その場の状況に応じて展開させる学習活動



AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

OUTWARD-EXTEMPORANEOUS

外向き-即興型

Examples 例:

- Role Plays ロールプレイ
- Facilitated Discussions
ファシリテートされたディスカッション

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

OUTWARD-PREPARED

外向き-準備型

Examples 例:

- Formal Debates ディベート
- Presentations プレゼンテーション

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

INWARD-EXTEMPORANEOUS

内向き-即興型

Examples 例:

- Written Peer Review of Written Work
学生同士の相互評価を記述
- Pause for Reflection
思索する時間をとる

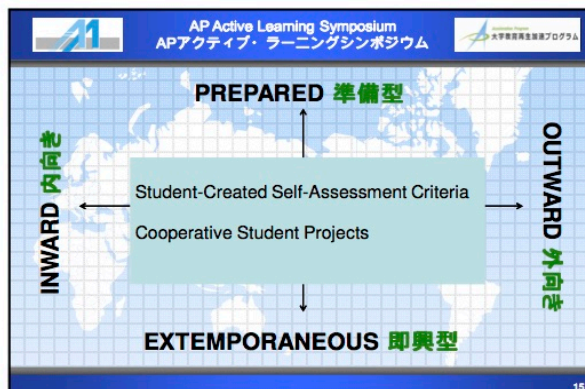
AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

INWARD-PREPARED 内向き-準備型

Examples 例:

- Self-assessment 自己評価
- Written Paraphrases / Summaries
言い換えたり、概要をまとめて書くこと

13

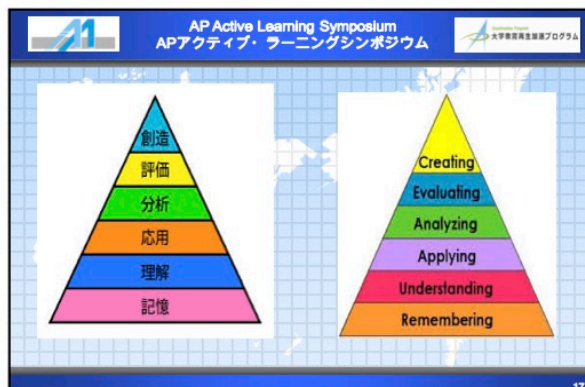


AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Method 研究方法

- Class observations
- Interviews
- 授業見学
- インタビュー

16



AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Results (thus far)

- A wide variety of activities were found
- Teachers overwhelmingly choose "application" as the critical thinking goal.

これまでの調査で明らかになったこと～

- 多種のアクティビティーが導入されている。
- 教員の多くが「応用」を批判的思考のゴールと捉えている。

18

(3) 「アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング」 (その1)

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Active Learning and Critical Thinking
アクティブラーニングとクリティカル・シンキング

Active Learning Working Group
クリティカル・シンキング ワーキンググループ

発表者: Dr. Gregory J. Dunne

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

I. Active Learning & Critical Thinking: A Year in Review
アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング: 1年の振り返り

Preview →

- > Reviewing Qualitative Research & Visibility
- > Connecting Active Learning & Critical Thinking
- > Developing CTS Through Active Learning

内容 →

- > 質的研究と可視化の見直し
- > アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキングの結合
- > アクティブ・ラーニングによるクリティカル・シンキング能力開発

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Reviewing Qualitative Research & Visibility
質的研究と可視化

2015

- Identified AL Strategies through Classroom Observations
- Built an Index of AL Strategies
- Categorized AL Strategies
- 授業参観によるアクティブ・ラーニング手法の割り出し
- アクティブ・ラーニング手法のインデックス化
- アクティブ・ラーニング手法のカテゴリー分類

2016

- Documentation System
- 文書システム

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

II. Connecting Active Learning & Critical Thinking
アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキングを結びつける

Moving Toward Quantitative Research:
量的研究の移行

What is the linkage between active learning strategies & the development of critical thinking skills?
アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング能力開発との結びつきは何か

How do we know that active learning strategies can help to develop critical thinking skills?
どうすればアクティブ・ラーニングの手法がクリティカル・シンキング能力を開発する助けとなるのかわかるのだろうか。

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Accomplishments of MIC Critical Thinking Survey:

- Provided "a detailed look at student perceptions of critical thinking practice in the different types of courses offered at MIC."
- Polled students on multiple aspects of critical thinking practice (skills) without ever mentioning the term critical thinking.
- Allowed instructors in specific disciplines to identify multiple aspects of critical thinking practice (skills) used in their courses.

Murguia, Salvador, et al. "Student Perceptions of Critical Thinking Practice" Comparative Culture, The Journal of Miyazaki International College, Online-Only Journal, Volume 16 (2011): Page 1 to 27, 11 November 2015.

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Accomplishments of MIC Critical Thinking Survey:
MICにおけるクリティカル・シンキング調査の成果

- MICにおける様々な授業でのクリティカル・シンキングの実践についての学生の認識を把握
- クリティカル・シンキングの実践(能力)についてクリティカル・シンキングという言葉を全く使わずに学生に調査を実施
- 特定の専攻分野の授業で行っているクリティカル・シンキングの実践(能力)の様々な側面を教員が確認

Murguia, Salvador, et al. "Student Perceptions of Critical Thinking Practice" Comparative Culture, The Journal of Miyazaki International College, Online-Only Journal, Volume 16 (2011): Page 1 to 27, 11 November 2015.

(その2)

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Active Learning and Critical Thinking
アクティブラーニングとクリティカル・シンキング

Critical Thinking Working Group
クリティカル・シンキング ワーキンググループ

発表者 : Dr. Benjamin A. Peters

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Why Critical Thinking? なぜクリティカル・シンキングなのか

A shift has occurred in education:
教育における変革

Remembering information → 暗記

- > Finding relevant information
関連性のある情報の収集
- > Understanding and evaluating information
情報の理解と評価
- > Using information effectively
情報の効果的な活用

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Why Critical Thinking? なぜクリティカル・シンキングなのか

"Good critical thinking might be seen as the foundation of science and a liberal democratic society." (*Daigaku-ko*, p.41)

「良いクリティカル・シンキングは、科学や自由民主主義社会の基礎と考えるかもしれませんが。」(「大学考」40ページ)

Otsubo, H. (2014). *Daigaku-Ko*. The English-based Liberal Arts Education of Miyazaki International College. Tokyo: Bungeishunju Publishing Department.

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Why Critical Thinking? なぜクリティカル・シンキングなのか

"Now I must describe how one goes about learning critical thinking. The answer to this question is, in a word, "active learning." (*Daigaku-ko*, p.47)

次はどのようにしてこれを学ぶのかを説明しなければなりません。一言でいえば、「アクティブ・ラーニングするのです」というのが答えです。
(「大学考」46ページ)

Otsubo, H. (2014). *Daigaku-Ko*. The English-based Liberal Arts Education of Miyazaki International College. Tokyo: Bungeishunju Publishing Department.

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

CAT – Critical Thinking Assessment Test

Designed by Tennessee Technological University, the CAT Instrument is a unique tool designed to assess and promote the improvement of critical thinking and real-world problem solving skills. The National Science Foundation (NSF) has provided support for its development.

CATは「実社会の問題に対して、大学で身につけたクリティカルシンキングの能力をどの程度応用できるか」を測定することが目的である。
全米科学財団（NSF）の支援によって開発されたものである。

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Skill Areas Assessed by the CAT
CATによって評価される能力

Evaluating Information from Other Points of View

- Separating factual information from inferences
- Interpreting numerical relationships in graphs
- Understanding the limitations of correlation data
- Evaluating evidence and identifying inappropriate conclusions

違った観点から情報を評価する

- 徳則と事実にもとづいた情報とを区別する
- グラフにおける関数を解釈する
- 相関データの限界を理解する
- 証拠を評価し、適切ではない結論を特定する

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Skill Areas Assessed by the CAT
CATによって評価される能力

Creative Thinking <ul style="list-style-type: none"> Identifying alternative interpretations for data or observations Identifying new information that might support or contradict a hypothesis Explaining how new information can change a problem 	クリエイティブ・シンキング <ul style="list-style-type: none"> データや観察結果について別の解釈を見出す 仮説を裏付けるあるいは否定する新たな情報を見出す 新たな情報が問題把握をどのように変えるかを説明する
---	--

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Skill Areas Assessed by the CAT
CATによって評価される能力

Learning & Problem Solving <ul style="list-style-type: none"> Separating relevant from irrelevant information Integrating information to solve problems Learning and applying new information Using mathematical skills to solve real-world problems 	学習および問題解決 <ul style="list-style-type: none"> 関連性のある情報と関連性のない情報を識別する 問題解決のために情報を統合する 新しい情報を学び応用する 数学的な能力を使って実社会の問題を解決する
---	---

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Skill Areas Assessed by the CAT
CATによって評価される能力

Communication <ul style="list-style-type: none"> Communicating ideas effectively 	コミュニケーション <ul style="list-style-type: none"> 効果的に考えを伝える
--	---

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

CAT Design

The CAT is designed as a 1-hour test with 15 questions. Scores range from 0 to 38 points. The average score for college seniors in the U.S. is 19.5 points. The average gain over 4 years of college is 4.5 points.

CATデザイン

CATは15問の質問からなる所要時間1時間のテストです。最低点は0点で最高点は38点となります。米国での大学4年生の平均得点は、19.5点です。大学の4年間の過程を経た学生の平均的な得点の上昇は4.5点です。

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Why assess critical thinking?

- We measure success for accountability.
- Assessment drives improvement efforts.
- How we assess determines what students learn.

なぜクリティカル・シンキングを評価するのか

- 教育上の責任のために成功を測る
- 評価により向上心が生まれる
- 評価によって学生が何を学ぶべきであるのか判断できる

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Closing the Loop in Assessment and Quality Improvement
評価と向上のサイクル

© 2007 Tennessee Technological University

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Developing Parallel Learning Activities to CAT

- According to TTU, parallel learning activities between pre-test and post-test can raise the average CAT score of a class by 4 points.
- CAT questions serve as models for constructing discipline specific analogs that can be used as instructional tools for involving students in active learning that encourages critical thinking.

CATのための並列学習アクティビティの開発

- デネシー工科大学によれば、事前テストと事後テストの間に行う並列学習アクティビティによってその学年のCATの平均得点を4点上昇させることが可能である。
- CATの試験問題は、学生のクリティカル・シンキング能力を向上させるために行うアクティブ・ラーニングの手段となる専門領域に沿った類似したアクティビティを作成するモデルとなる。

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Example Activity

Critical Thinking Skill
Separate relevant from irrelevant information when solving a real-world problem.

Scenario
The year is 1957, and you are one of President Eisenhower's policy advisors. President Eisenhower is concerned about a "missile gap" with the Soviet Union. In other words, he is worried that the Soviet Union has more nuclear missiles (ICBMs) than the U.S. The President is preparing a budget request to Congress. He needs to know whether or not he should request an increase in the budget to produce more nuclear missiles. The President wants you to gather and analyze information and give him your policy recommendation.

アクティビティの例

クリティカル・シンキング能力
実生活の問題を解決するために関連性のある情報と関連性のない情報を区別する。

シナリオ
時は1957年。あなたはアイゼンハワー大統領の政策アドバイザーのひとりです。大統領はソビエトとの「ミサイル・ギャップ」を懸念しています。つまり、大統領はソビエトが米国より多く持っていることを心配しています。大統領は実際に提出する予算案を準備しています。核ミサイルをより多く生産するために予算を増やすことを要求するべきかどうかを知る必要があります。大統領はあなたにこの件に関する情報収集と分析をして、政治的な判断を推奨することを求めています。

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Example Activity

Question Which of the types of information listed below would be the most helpful to you as you prepare your analysis and advice? Circle four.

- 1) Aerial reconnaissance photos of major Soviet military bases for the years 1955-1957.
- 2) CIA interview with a Soviet military officer who is loyal to the U.S.
- 3) Amount of uranium mined in the Soviet Union per year, 1954-1955.
- 4) Total Soviet military expenditure per year, 1950-1957.
- 5) Soviet plan for future missile production, 1960-1965.
- 6) Actual Soviet budget to pay nuclear scientists for 1948-1957.
- 7) Number of nuclear missile tests by the Soviet per year, 1954-1957.
- 8) Current number of U.S. nuclear missiles.

アクティビティの例

経緯 下記の中で、問題を分析を行い、提議をするために最も役に立つと思われる情報はどれですか、4つを選択して丸をつけてください。

- 1) 1955年から1957年までの主要なソビエトの軍事基地の航空偵察写真
- 2) CIAによる米国のスパイであるソビエトの軍事関係者へのインタビュー
- 3) 1954年から1956年の間のソビエトの年間のウラン採掘量
- 4) 1950年から1957年までのソビエトの年間軍費支出総額
- 5) 1960年から1965年までのソビエトのミサイル生産計画
- 6) 1948年から1957年までのソビエトの原子力科学者への年間給与予算
- 7) 1954年から1956年のソビエトの核ミサイルのテスト回数
- 8) 現在の米国戦略ミサイル数

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Course Task Design

- Engage students in active learning.
- Link learning activities to real-world goals and problem-solving.
- Create numerous opportunities to practice in divergent contexts.
- Develop a scoring rubric for each assignment.
- For course assignments, indicate what percentage of the score will come from factual knowledge and what percentage will come from critical thinking.

授業でのタスクのデザイン方法

- 学生のアクティブ・ラーニングを促進する
- 学習アクティビティを単生での目標と問題解決を結びつける
- 様々な異なる状況において学習できる機会を作る
- 課題を採点するためのルーブリックを開発する
- 授業で課題を出す際に、事実に基づく得点とクリティカル・シンキングによる得点のパーセンテージ比率を示す

AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム

Beyond the CAT:

Develop a student CT outcome assessment system specific to the curricular, cultural, language, and pedagogical characteristics of the *School of International Liberal Arts and School of Education at Miyazaki International College (MIC)*.

今後の最終目標:

本学、国際教養学部及び教育学部教育課程や文化、言語及び教育上の特性に合わせたクリティカル・シンキング達成度測定システムの開発

2. WGの活動

(1)e ポートフォリオWG

1) 活動日程

e-ポートフォリオのワーキンググループは、Moodle/Mahara の利用の普及・促進のために生徒のみならず、教員に対しても様々な活動を行った。

① 教員へ Faculty Development

Moodle/Mahara の利用に関するワークショップを計 7 回開催した。

日程	内容	参加人数
2015 年 5 月 28 日	iMoot#15	7 名
5 月 29 日	iMoot#15	23 名
9 月 28 日	e ポートフォリオ FD (教育学部教員向け)	5 名
9 月 28 日	e ポートフォリオ FD (国際教養学部教員向け)	18 名
11 月 6 日	iMoot# sign in	10 名
2016 年 1 月 28 日	How to use e-portfolio for AL (国際教養学部教員向け)	18 名
2 月 18 日	e ポートフォリオ FD (教育学部教員向け)	14 名

② 生徒への Moodle/Mahara の使用に関するワークショップ

それぞれの学年に対して、オリエンテーションは数回にわたり行われた。

日程	学部	学年
2015 年 10、11 月	国際教養学部	2 年
2015 年 10、11 月	国際教養学部	3 年
2015 年 10 月、2016 年 1 月	国際教養学部	1 年
2016 年 2 月、3 月	教育学部	1 年

③ タブレット PC

タブレット PC を平成 26 年度に 60 台、平成 27 年度に 100 台購入し、クラスごとの貸し出し、新入生および 2 年生の希望者に貸与を行った。7 月 21 日・23 日・24 日に希望した学生にタブレット PC を貸与にあたってオリエンテーションを開催。学生が効果的にタブレットを使用できるよう、e-ポートフォリオセンターが学生を指導した。

2) 活動内容 (グループリーダー・オチ教授)

E-Portfolio WG Report 2015: Debra J Occhi, WG Leader

Introduction

We were half a year late of the expected implementation timeframe; however, we now have a working e-Portfolio system that follows the AP grant plan. This system uses existing Gmail login usernames and passwords. The workflow involves Mahara for input and creation of output pages, with submission of this work into Moodle assignment modules for rubric-based grading. We provided several orientations for students (SILA) and faculty, FD sessions, and a poster with workshop at the AL Symposium. Orientation materials are currently housed in the Moodle section of PORTFOLIO in a self-enroll course called Mahoodle Orientation for members of the MIC community (<http://portfolio.miyazaki-mic.ac.jp/moodle/login/index.php>)

System Setup & Orientation

In April (the anticipated start date) the AP leader was negotiating with vendors for setting up the system. In May, Passos set up a trial of Moodle/Mahara software on his personal server. Thanks to this, Occhi was able to create a model of the e-portfolio system, with proof-of-concept results, interaction design personas for the various groups of users and their work expectations, and explanatory materials for the system workflow. The rubric materials were presented to the Rubrics WG in May; their editorial suggestions were incorporated. In July, Occhi gave an overview of the e-portfolio system to first year students at tablet orientation and gave detailed instruction to the vendor for materials preparation.

The e-portfolio software was installed in late September just prior to the orientation date. Orientations for ILA students (1st – 3rd year) were held from October to January, with weekly help desk time provided. Since the vendor's materials didn't match the specs for the e-portfolio system workflow, we created additional materials and distributed them to students. These are archived online with the other orientation materials.

Orientations for faculty were held on 28 September (for all faculty with one session in English & one in Japanese) and on 24 December (for EDU). On 5 November Occhi led an FD for ILA explaining the interface of new Moodle & Mahara with orientation on rubric building, and on 28 January Murray, Occhi, and Passos held an FD on “Using e-Portfolios for Active Learning” that included an overview of the system and a case study from a first-year ITC (Information & Communication Technology) course.

Scholarship

We sponsored two iMoot conference events on campus to encourage faculty Moodle/Mahara involvement (30 May and 6 Nov). Occhi attended the Mahara Open Forum conference in Chiba on 10 & 11 October. Materials from these events were made available to interested faculty and staff. Occhi and Passos have submitted abstracts on our e-portfolio research to the Conference on Global Higher Education slated for June 2016 at Lakeland College Shinjuku.

PDCA in progress

The status of the e-Portfolio Center, its administration and committee as described in the AP grant remain unclear; however, the e-portfolio WG leader, whose expected tasks were completed by orientation, has taken on various center tasks with the support of Ms Ikeda. Among these, the AP grant’s expectation of generating evidence for active learning by e-portfolio pages to be graded by rubrics has been accomplished by almost half the first-year SILA students.

We are currently preparing to evaluate two sets of portfolio pages: those made for orientation by students and faculty, and the first-year SILA students’ end-of-year pages. We also anticipate collecting data from first-year ICT, second-year onsite Study Abroad, and IDS308 portfolio pages. This data will aid our revision of the orientation materials to be used in April 2016 with faculty, first-year, and second-year students, and facilitate planning of second-year portfolio implementation (first semester and Study Abroad).

Since the e-Portfolio project plan in the AP grant did not allow time for a preliminary planning, testing and development stage prior to implementation, or provide

any mechanism to enforce e-Portfolio use, we have not been able to reach all first-year students despite multiple, bilingual orientation sessions. However, an e-portfolio component has been incorporated into the SILA's new First Year Liberal Arts & Global Studies introductory courses, along with the expansion of ICT courses. We anticipate these curricular uses in addition to the existing software orientation will help to routinize e-portfolio use among first year SILA students and lead to better outcomes.

E-Portfolio WG Report #2, 2015-16: Debra J Occhi, WG Leader

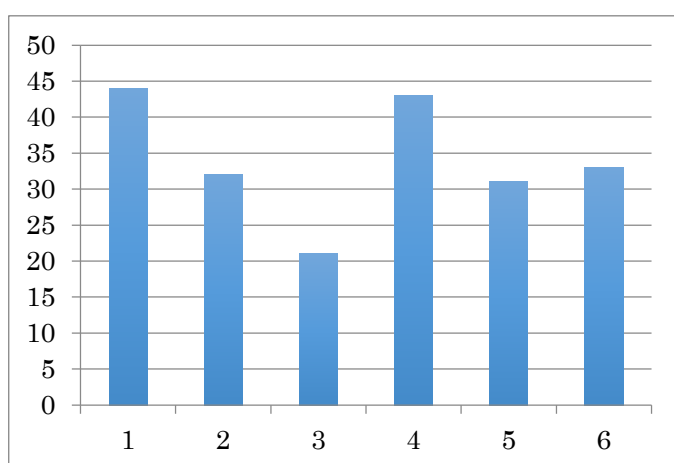
Introduction

This report follows up on the first **E-Portfolio WG Report 2015** submitted in late January 2016.

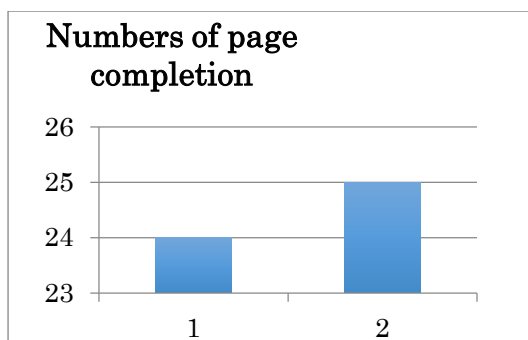
E-Portfolio Trial Implementation: Student Orientations and Outcomes

SILA first year students were provided six training sessions in fall semester 2015: three for introducing Mahara and three for preparing the end-of-year page. 52 of 56 students (93%) attended at least one session, though not all the students attended at any given session; see chart “Numbers of first year students at training” below (n.b. The student name file I received had only 56 students though the number posted in GA is 62).

Numbers of first year students at training



24 students created an introduction page, and 25 created the end-of-year page, see chart “Numbers of page completion”.



This data shows that less than half the students who attended any training completed page submission during this initial implementation round (47% and 48% of 52 respectively). This is far from ideal; however, it must be considered that e-portfolio use was not yet officially implemented into curricula as a course with grades and credits. Moreover, first year students had not been made aware initially that tablet use entailed e-portfolio use. Therefore, their overall motivation to participate in e-portfolio activity was low. Since they will be doing e-portfolios for Study Abroad in 2016-17, they will be given further orientation during SA pre-departure meetings and made to complete a spring semester page collection assignment to ensure they have software skills along with the usual SA portfolio specifications before departure. Also during 2016-17, upper division specifications must be developed by the WG to support this initial implementation group of students throughout the remainder of their MIC career.

Despite the low number of first year page submissions, there have been some encouraging findings from the data analyzed so far. The end-of-year pages show that students are able to provide evidence of their learning and reflect upon it, expressing even at this early stage of English proficiency their development with regard to the SILA objectives. In turn these outcomes provide support for achievement of the AP mission. To improve implementation in 2016-17, e-Portfolio use has been incorporated in the new Introduction to Liberal Arts and Introduction to Global Leadership courses for all first-year SILA students. There will be software orientation in the first three weeks of spring semester.

One first-year Intro to IT course (Passos & Murray) successfully integrated the e-Portfolio into its practice. They also provided a case study of this implementation presented for Faculty Development for both SILA & SEDU and also at an academic conference. Occhi trained other students who did not receive tablets from AP.

SILA second year students on campus are few during the fall Study Abroad period; however, these on-campus SA Area Studies students (Bishop & Kasai) were trained during class time and created pages. Their outcomes provide insight in preparing for the rising second year students.

SILA upper division students in IDS 308 Instructional Technology (Adachi) were also trained during two class periods and created pages. Six open orientation sessions were held for upper division students. As mentioned in the previous report, Occhi also held a weekly help desk hour; this was used for student support or other e-portfolio related matters.

EDU department implementation so far has included one orientation session each for faculty (who were also invited to the overall orientation in September). 32 first years and 11 second years who attended orientation created introduction pages. It is still unclear what the overall goals are for the SEDU e-portfolio implementation; this is a concern for the success of the AP mission. Their participation level has been much lower than that of SILA up to this point. The WG leader requested administration to assign two new members from EDU faculty to join the WG in 2016. These members must actively take part to establish expected outcomes and assessment criteria for their students' e-portfolio experience, and lead workshops to help their students provide evidence that they meet SEDU outcomes and fulfill AP goals.

Faculty Development and Scholarship

The previous section describes FD sessions by Passos and Murray explaining their trial implementation. They also presented research papers on this topic at the IEEE Hi no Kuni Symposium at Miyadai in March. As mentioned in the previous report, Occhi and Passos are presenting e-portfolio research to the Conference on Global Higher Education slated for June 2016 at Lakeland College Shinjuku, and Occhi will present at PANSIG in May. These efforts help fulfill AP objectives and contribute to overall WG goals, providing feedback that enhances PDCA-based improvement of our work.

In March Occhi followed up the Rubric WG's explanatory session of the Rubrics FD with a hands-on rubric creation and assessment workshop in e-Portfolio. This included

an explanation of the overall system flow of the AP designated process: creation of Mahara pages submitted into Moodle assignments and graded with a rubric. This workshop (as with other orientation materials) remains available online for self-study. The materials will be revised in 2016-7.

Furthermore, in order to facilitate use of e-Portfolio as an alternative to the paper portfolios used for faculty reappointment, Occhi received consent from Dean Thompson for that initiative and sent a mail to faculty, also providing online resources to guide users. Especially given the current lack of shared printer resources, e-portfolio provides a handy option. It is also possible that greater faculty awareness of e-portfolio use will help support students' efforts.

PDCA

Several issues and plans for improvement have already been discussed. Two other serious areas of concern described below are those of staffing/workload and budget.

As mentioned in the previous report, the e-portfolio WG leader, whose expected tasks according to the AP guidelines were completed by the initial orientations, took on various e-Portfolio Center tasks (expected of the Assessment Officer) with translation and other support by Ms Ikeda, the part-time assistant. This increased commitment seemed necessary to the survival of the AP project, whose logistics regarding e-portfolio implementation were largely left unspecified. These efforts (some of which are described above and in the previous report) have necessitated a substantial time investment, easily surpassing that of a regularly taught course. Administration has supported these efforts in part: Occhi received one course release (along with teaching one regular course and one special tutorial) in fall, and though another release was slated, she now has two regular courses with one special tutorial in the spring. This means, effectively, no real course reduction (n.b. special tutorials do not show on the official schedule). This projected workload is an issue of concern, since orientation duty alone will double for 2016-17 with the entering first year class and the need for re-orienting the rising second year students. Furthermore, there is an increased need to establish criteria and develop teaching and assessment materials in support of new uses for existing SILA students' e-portfolios (e.g., Study Abroad, upper division) as well as provide support for SEDU implementation.

The reformulation of the WG as described above (i.e., Occhi, Passos, two SEDU faculty) may help facilitate the SEDU implementation once those WG members are trained in e-portfolio use. It is also anticipated that a new assessment officer will join MIC in the spring. This person should eventually take on the e-portfolio center role, which is part of their job description, after a reasonable orientation period. However, it is unrealistic to expect that person to take on the existing demands immediately. Moreover, Ms. Ikeda the assistant may be leaving; this will be a huge loss to the AP office. Thus the burden on the e-Portfolio WG leader is likely to remain heavy for the spring semester at least. If administration does not support the channeling of teaching time into the effort of training e-portfolio use and these personnel changes do not take place, it will not be possible to maintain the slight momentum generated thus far for the e-portfolio project's progress.

There is also an ongoing concern of constantly shifting budgetary allotment which potentially effects the stability of the e-portfolio system at the hardware/software level. A reasonable investment in the backbone of e-portfolio for maintenance and improvement must be earmarked for each year of the AP.

(2) ルーブリック・ベース・シラバスWG

1) 活動内容（グループリーダー：ラスク准教授）

Rubric-Based Syllabus Working Group 2015-2016

For the past year the focal points of the Rubric-Based Syllabus Working Group (RBSWG) have been assessment, planning, training, and implementation.

Assessment (Informal Rubric Survey)

Beginning in Spring 2015, the RBSWG constructed an Informal Rubrics Survey to MIC faculty of both the SILA and EDU departments. The Informal Rubrics Survey was an online convenience sample of MIC faculty members, made available in both English and Japanese from June 10 to June 16. Twenty-four respondents completed the survey.

Findings

We found that the most important measurements of students' abilities among faculty were critical thinking, proficiency in communication, and a grasp of global perspectives. Less than half of the faculty use rubrics for overall student performance, presentations, exams, or regular homework assignments. However, nearly 9 out of 10 expressed a willingness to begin using or continue to use rubrics in their classes. Faculty expressed a desire to have a greater understanding of rubrics and how to use them as well.

Planning

Over the entire course of the Spring 2015 semester, the RBSWG held several meetings to construct an institutional rubric to be integrated into all syllabi during the Fall 2015 semester. In addition, as a response to the request for a greater understanding of rubrics and how to use them, the RBSWG planned 2 faculty development seminars. In addition, in response to the Active Learning Symposium during November 2015 we created a poster reviewing the tasks that our group have completed, as well as the tasks that we will complete in the next few years of the AP grant.

Training & Implementation

As stated before, the RBSWG planned and successfully completed 2 Faculty Development sessions. The first session, titled "Rubrics 101" and provided digitally in

early August 2015, both disseminated the results of the Informal Rubric Survey and gave a very basic description of (a) what rubrics are, (b) their purpose, and (c) introduced the MIC rubric.

The second session was given as a face-to-face seminar during the last week of September 2015. This seminar gave more detail about the different types of rubrics, as well as an introduction to the MIC Rubric-Based Syllabus. At this time, faculty members were offered hands on assistance with tailoring the rubric to their needs and posting syllabi including the rubric on the MIC database.

概要（日本語）

ルーブリックの作成にあたり、評価ルーブリックにどんな項目が含まれるのが望ましいかを調べるために、宮崎国際大学の教員に調査を行った。調査の結果、クリティカルシンキング、コミュニケーション能力、国際的感覚が上位3つであった。また、生徒のパフォーマンス、発表、テスト、課題等を評価するための評価ルーブリックを、教員はあまり使っていないことがわかった。しかし、9割の教員が、評価ルーブリックを継続的に使いたい、または新たに使いたいと興味を示した。

宮崎国際大学のどの授業にも使える評価ルーブリックの作成のために、ルーブリック評価グループで会議が定期的に行われた。また、教員が評価ルーブリックに対する知識を深めて利用できるように、教員に対するワークショップを2回開いた。ルーブリック101と称されたこのワークショップでは、宮崎国際大学の教員用の全体的な評価ルーブリックの導入、そして、それぞれの教員が自分の授業で使えるようにするための具体的なアドバイスもした。

2) RUBRIC 101

RUBRICS 101

RUBRIC WORKING GROUP
FACULTY DEVELOPMENT SEMINAR, SUMMER 2015

WHAT IS THIS?

- This material is being provided by the Rubric-Based Syllabus Working Group members to offer clarity on:
 - What rubrics are,
 - When rubrics can be used,
 - And how to use a rubric in a syllabus.
- You will also receive:
 - A template rubric and syllabus example including the editable rubric.

WHAT IS A RUBRIC?

- Rubrics ([←click here](#)) are tools used for assessment and evaluation
- Rubrics provide criteria for measuring progress and ability
- Rubrics help provide instruction and clarify expectations
- Examples ([←click here](#)) of rubrics can be found all over the Internet!



WHEN SHOULD I USE A RUBRIC?




- Rubrics can be used at a multitude of levels
 - As a tool for the college
 - To evaluate our mission
 - To evaluate our curriculum
 - As a tool for teachers
 - To evaluate our syllabi
 - To evaluate our courses
 - To evaluate student papers, assignments, and presentations
 - As a tool for students
 - To perform self evaluation
 - To offer peer evaluations

WHAT IS A RUBRIC-BASED SYLLABUS?

- A rubric-based syllabus is an important tool for consistent and valid evidence based learning
- Tool to set the tone and expectations of a course
- Helps to align the syllabus and course with the college's goals
- Provides measurement for student learning outcomes



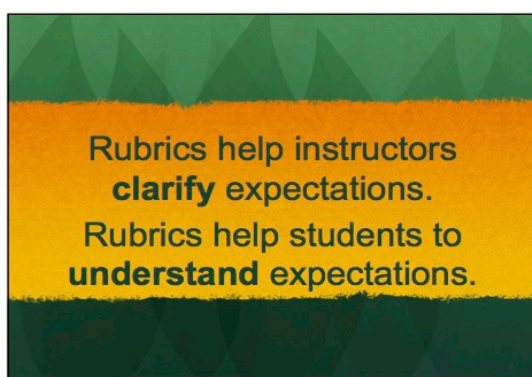
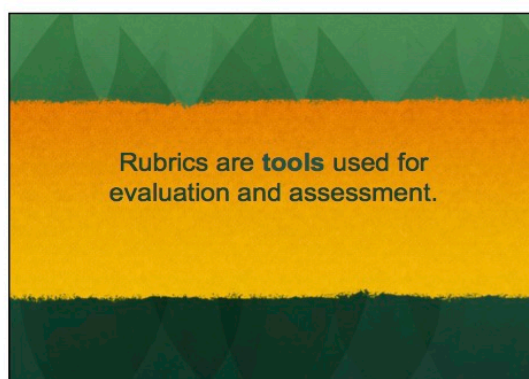
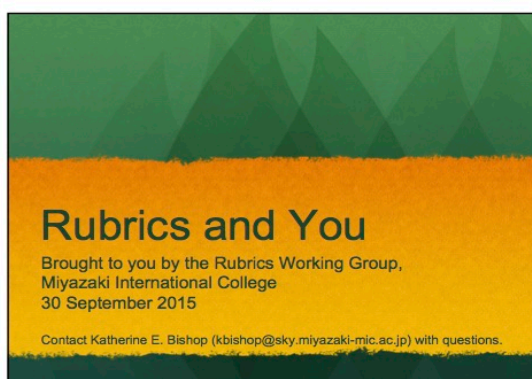
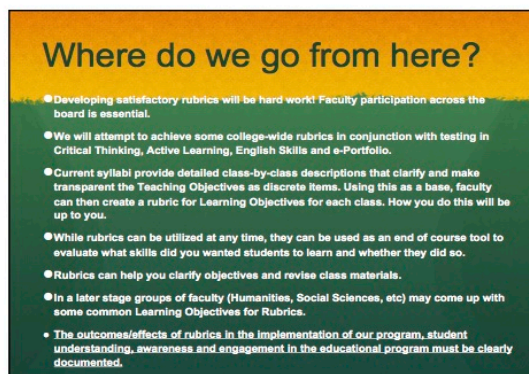
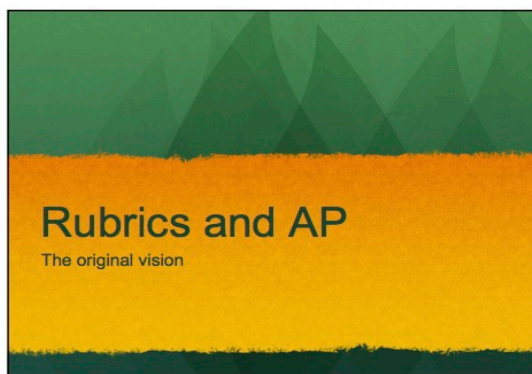
		英語科学通から採選された 大学教育再生加速プログラム				
						
W H E R E I S S U E S M I C , S	Critical Thinking	Advanced	Proficient	Developing	Emerging	No Attempt
		Ability to Identify & Solve Problems Information Gathering Assessment of Credibility	Thoughtful comments in class discussions Student shows proven ability to analyze data, gather and assess resources, and disseminate opinions in a scholarly manner.	Able to contribute to class discussions, and to perform a basic analysis of data, gather and assess resources, and express opinions in an adequate manner.	Beginning to evaluate the value in which information can be combined and applied to solving a given problem, but struggles with complex and relationships.	Student shows motivation but must learn the concepts and mechanisms that apply to critical thinking, such as information gathering, assessment and synthesis.
Advanced Communication Proficiency	Public Speaking	Public Speaking	Speaking is clear, using a broad range of vocabulary and relative jargon. Student uses appropriate social cues and nuances.	Able to create a relevant response when asked to express an opinion or respond to a complicated situation, but pronunciation and grammar can often make responses and explanations unclear to a listener and must be interpreted.	Able to answer questions and give basic information. However, inconsistent pronunciation, intonation and stress may sometimes make their responses difficult to understand or interpret.	Student is unsuccessful or finds it very difficult when attempting to explain an opinion or respond to a complicated scenario. The response may be limited to a single sentence or part of a sentence.
	Social Skills	Social Skills				
Global Perspectives	Cultural Relevancy	Cultural Relevancy	Fully engaged in current events and shows understanding of social inequalities and cultural differences.	Student is aware of current events and world cultures, but is unable to apply middle-level situations to her/his own life.	Definitely interested and intrigued in current events and world culture, but has difficulty understanding nuances.	Student expresses an interest in current events and an abstract point of view. Completely lacks awareness of world issues or events.
	Awareness of Current Events & Global Issues	Awareness of Current Events & Global Issues				I had no idea that this student was even enrolled in my class. ☛That is how understanding this student's performance was!
English Language Ability	Reading	Reading	Exhibits fluent/semi-fluent in speaking and writing. Grammar and reading ability similar to native English speaker. Able to use context clues when faced with unfamiliar vocabulary.	Proficient English ability, relies mainly on familiar vocabulary. Should be encouraged to advance beyond comfort zone.	Adaptative English ability; must reference dictionary often.	Student has some English ability, but lacks confidence in using and understanding. Very limited vocabulary knowledge, struggles with grammar and pronunciation. Unable to form questions.
	Writing	Writing				
Japanese Language Ability	Oral Communication	Oral Communication				
	Reading	Reading	Able to express one's self clearly and accurately both in writing and orally. Able to use context clues when faced with unfamiliar vocabulary.	Proficient oral and written communication, relies mainly on familiar vocabulary. Should be encouraged to advance beyond comfort zone.	Adaptative oral and written communication tends to have difficulty clearly expressing ideas.	Student shows a lack of confidence in writing, reading, and oral communication. Very limited vocabulary knowledge, struggles with grammar. Unable to form questions.
	Writing	Writing				
	Oral Communication	Oral Communication				

WHAT DOES THIS MEAN FOR ME?

- Beginning this Fall 2015, faculty across campus will be required to use a rubric-based syllabus
- This means incorporating either the MIC rubric shown (which you may alter) or some other sort of rubric system in your syllabus and course
- This does NOT mean that you have to grade your students using rubrics—the rubric system helps both you and your students set clear guidelines for achievement in your classes and/or MIC.
 - However, keep in mind that an institutional rubric and class rubrics will be integrated as part of the ePortfolio implementation.
- An editable template will be sent to you shortly to either plug into your current syllabi or alter to fit your needs.
- The Rubric-Based Syllabus Working Group will be holding a series of FD sessions to help you get the most out of this experience! Stay tuned.

3) Rubrics and AP

7/19/16



Likewise, rubrics help students to understand expectations and instructions.

Rubrics help students to identify areas of strength and weakness.

Rubrics also help students to see their progress over time.

Rubrics help to put everyone on the same page.



- Imagine that you had to send the person to your left out shopping for you for a **major** occasion.
- **The stakes are high.**
- They need to get you a **spiffy** outfit, **ace** shoes, and some **fly** accessories. Oh, and they should order you a **delicious** meal, too.
- Do you trust them to do it?

Abstractions,
Clarified

Oh, really?

- What if the situation were reversed? Would you feel absolutely confident that you'd be able to match their expectations and intuit their notions of "spiffy" and "ace"?
- What about for the person to your right?

Abstractions,
Clarified

- Might you doubt your interpretation of “spiffy”?
- Might you spend a long time trying to decide what the heck your neighbor means by “ace”?
- Might you put off your task for too long because you don’t really understand what’s expected of you?

Abstractions,
Clarified

- You could do with some more guidelines, eh?
- We’ve all been there.
- Your students are there now.

Abstractions,
Clarified

- Some sort of definite schematic that would help you to understand what the other person sees as “spiffy,” “fly,” “ace,” and “delicious” would be helpful, right?
- And if it included what the other person sees as less than “spiffy,” all the better, right?

Abstractions,
Clarified

Basically, what
you want here
is a rubric.

Levels of performance (scale)

Rubric design	4	3	2	1
Criterion 1 (Yes and more)	(Yes and more)	(Yes, but...)	(Yes)	(No)
Criterion 2				
Criterion 3				

Performance descriptors

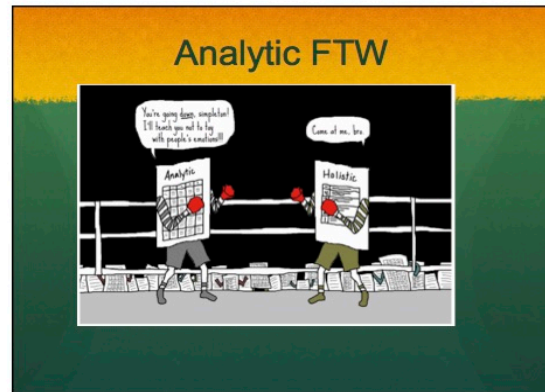
Level	Logical Coherence	Relevance	Clarity	Language Control
5	Highly coherent and logical. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Highly relevant. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Highly clear. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Highly controlled. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.
4	Coherent and logical. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Relevant. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Clear. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Controlled. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.
3	Generally coherent and logical. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Generally relevant. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Generally clear. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Generally controlled. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.
2	Some coherence and logic. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Some relevance. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Some clarity. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.	Some control. The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.
1	Lacks coherence and logic. The central purpose of the student work is unclear and supporting ideas are not well-focused. Details are not relevant, do not enrich the work.	Lacks relevance. The central purpose of the student work is unclear and supporting ideas are not well-focused. Details are not relevant, do not enrich the work.	Lacks clarity. The central purpose of the student work is unclear and supporting ideas are not well-focused. Details are not relevant, do not enrich the work.	Lacks control. The central purpose of the student work is unclear and supporting ideas are not well-focused. Details are not relevant, do not enrich the work.

There are several types of rubrics

- Analytical: A grid with the parameters on the Y-axis and the performance descriptors on the X-axis
- Developmental: Shows progress rather than mastery or a lack of mastery.
- Holistic: Bases scale on a single parameter.
- Ex: Articulating thoughts orally in final presentation.
- Single-point: Like analytic but only describes criterion for proficiency, leaving room for comments on both sides

	Needs Improvement (1)	Developing (2)	Sufficient (3)	Above Average (4)
Clarity (Thesis supported by relevant information and ideas.)	The central purpose of the student work is not well-defined. Central ideas are not focused to support the thesis. Thoughts appear disconnected.	The central purpose of the student work is identified. Ideas are generally focused in a way that supports the thesis.	The central purpose of the student work is clear and ideas are almost always focused in a way that supports the thesis. Relevant details illustrate the author's ideas.	The central purpose of the student work is clear and supporting ideas are always well-focused. Details are relevant, enrich the work.
Organization (Sequencing of elements/ideas)	Information and ideas are poorly sequenced (the author jumps around). The audience has difficulty following the thread of thought.	Information and ideas are presented in an order that the audience can follow with minimum difficulty.	Information and ideas are presented in a logical sequence which is followed by the reader with little or no difficulty.	Information and ideas are presented in a logical sequence which flows naturally and is engaging to the audience.
Mechanics (Correctness of grammar and spelling)	There are five or more misspellings and/or systematic grammatical errors per page or 8 or more in the entire document. The readability of the work is seriously hampered by errors.	There are no more than four misspellings and/or systematic grammatical errors per page or six or more in the entire document. Errors distract from the work.	There are no more than three misspellings and/or grammatical errors per page and no more than five in the entire document. The readability of the work is minimally interrupted by errors.	There are no more than two misspelled words or grammatical errors in the document.

Domain	Initial Level of Development (1)	Intermediate Level of Development (2)	Mature Level of Development (3)
Cognitive	Assumes knowledge is certain and categorizes knowledge claims as right or wrong; is naive about different cultural practices and values; resists challenges to one's own beliefs and views differing cultural perspectives as wrong	Evolving awareness and acceptance of uncertainty and multiple perspectives; ability to shift from accepting authority's knowledge claims to personal processes for adopting knowledge claims	Ability to consciously shift perspectives and behaviors into an alternative cultural worldview and to use multiple cultural frames
Intrapersonal	Lack of awareness of one's own values and intersection of social (racial, class, ethnicity, sexual orientation) identity; lack of understanding of other cultures; externally defined identity yields externally defined beliefs that regulate interpretation of experiences and guide choices; difference is viewed as a threat to identity	Evolving sense of identity as distinct from external others' perceptions; tension between external and internal definitions prompts self-exploration of values, racial identity, beliefs; immersion in own culture; recognizes legitimacy of other cultures	Capacity to create an internal self that openly engages challenges to one's views and beliefs and that considers social identities (race, class, gender, etc.) in a global and national context; integrates aspects of self into one's identity
Interpersonal	Dependent relations with similar others is a primary source of identity and social affirmation; perspectives of different others are viewed as wrong; awareness of how social systems affect group norms and intergroup differences is lacking; view social problems egocentrically; no recognition of society as an	Willingness to interact with diverse others and refrain from judgment; relies on independent relations in which multiple perspectives exist (but are not coordinated); self is often overshadowed by need for others' approval. Begins to explore how social systems affect group norms and intergroup relations	Capacity to engage in meaningful, interdependent relationships with diverse others that are grounded in an understanding and appreciation for human differences; understanding of ways individual and community practices affect social systems; willing to work for the rights of



**THERE ARE MANY USEFUL
RESOURCES OUT THERE.**

HERE ARE TWO.

<http://www.cultofpedagogy.com/holistic-analytic-single-point-rubrics/>

<http://resources.depaul.edu/teaching-commons/teaching-guides/feedback-grading/rubrics/pages/types-of-rubrics.aspx>

**Please email
kbishop@sky.miyazaki-mic.ac.jp
with questions, comments,
or concerns**

4) Informal Rubrics Survey

Informal Rubrics Survey

Research Results, Takeaways, and Recommendations

Online Convenience Sample Survey of MIC Faculty Members, June 10-16, 2015

Contents:

- Sample Distribution
- Ranking of Skills and Traits
- Rubric Use and Attitudes
- Appendix A: Additional Traits
- Appendix B: Reasons Why Faculty Do Not Currently Use Rubrics
- Appendix C: Suggestions for Making Rubric Transition Easier

8/8/2016

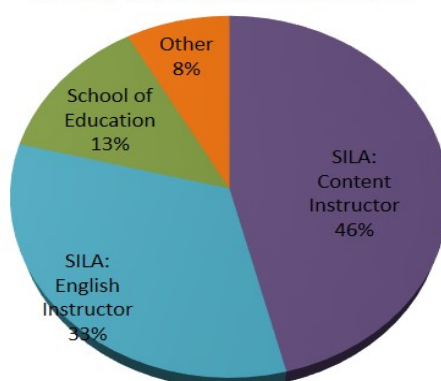
Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group
For additional information, contact Jeniece Lusk, PhD (Rubric WG Leader)
jlusk@sky.miyazaki-mic.ac.jp | 0985-85-5931

1

Sample Distribution

Online Convenience Sample Survey of MIC Faculty Members, June 10-16, 2015

Faculty Main Instructional Area



Of the 24 MIC faculty respondents, nearly one-half are SILA Content Instructors.

8/8/2016

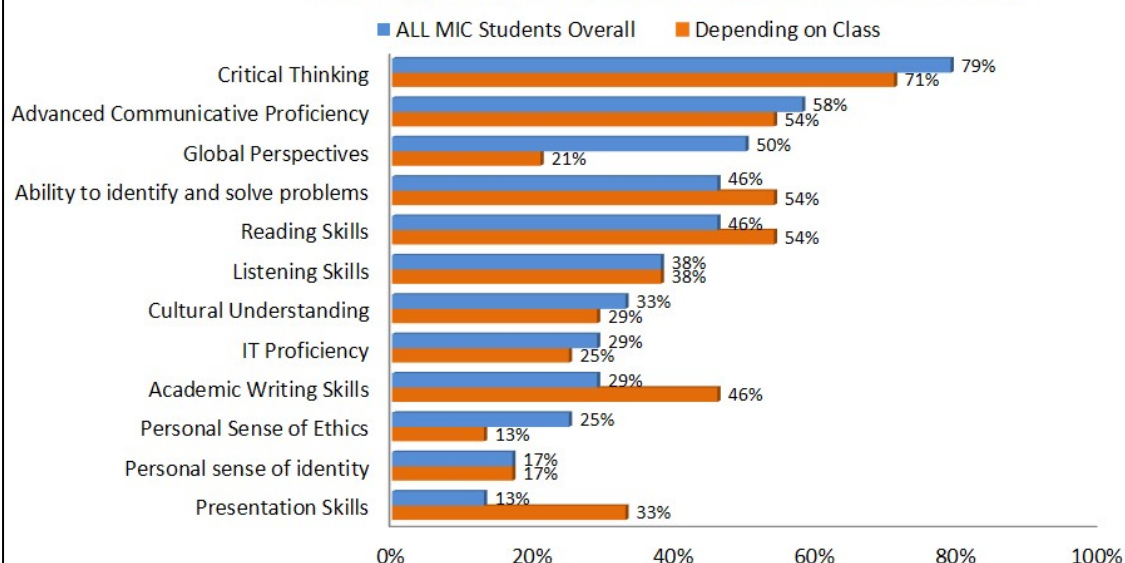
Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

2

Ranking of Skills and Traits

Online Convenience Sample Survey of MIC Faculty Members, June 10-16, 2015

Ranking of Most Important Student Skills and Traits



Among all MIC faculty, over half agree that critical thinking, advanced communicative proficiency, and global perspectives are the most important skills and traits for all MIC students to have. While presentation and academic writing skills aren't seen as very important to all students in general, they rank higher as traits important in class.

8/8/2016

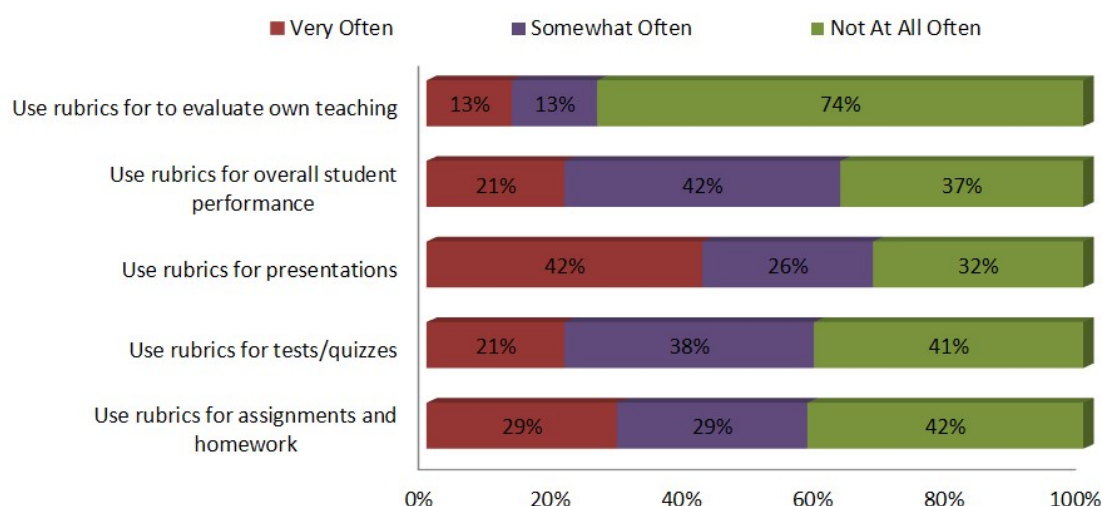
Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

3

Rubric Use and Attitudes

Online Convenience Sample Survey of MIC Faculty Members, June 10-16, 2015

Current Rubric Use Among ALL MIC Faculty



Over 60% of all MIC faculty use rubrics for presentations or for overall student performance at least somewhat often. The highest percentage of faculty using rubrics "very often" use them for evaluating presentations.

8/8/2016

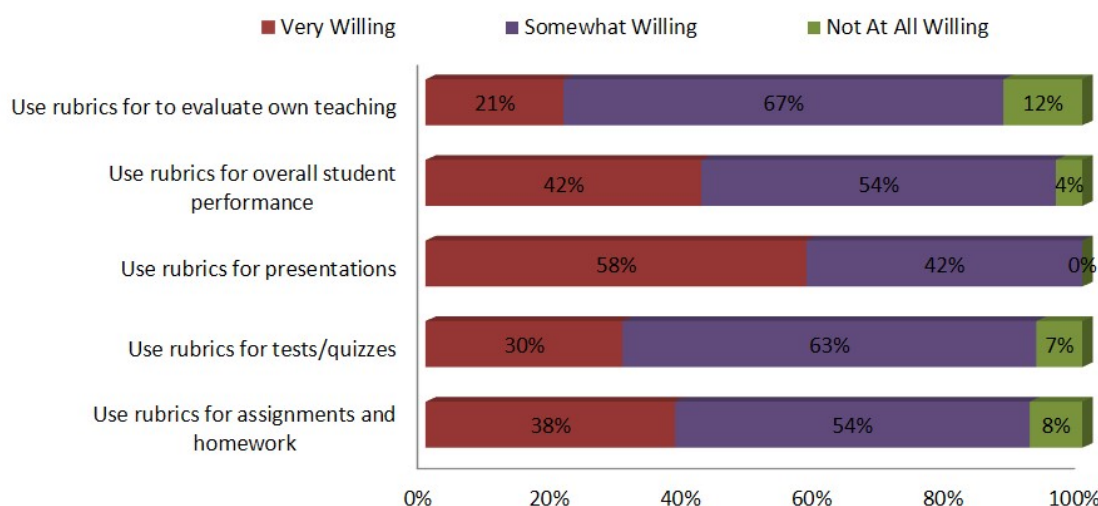
Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

4

Rubric Use and Attitudes

Online Convenience Sample Survey of MIC Faculty Members, June 10-16, 2015

Willingness to Use/Continue Using Rubrics Among ALL MIC Faculty



The majority of MIC faculty are at least somewhat willing to use or continue using rubrics. Faculty seem most open to using rubrics for evaluating student presentations.

8/8/2016

Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

5

Informal Rubrics Survey: Appendix A Additional Traits

• What other traits would you add to either list?

- Collaborative work/teamwork skills
- Inquisitiveness with regard to a wide range of issues
- Open-mindedness regarding divergent world views
- Fair mindedness in appraising reasoning
- Honesty in facing one's own biases, prejudices, stereotypes, egocentric or sociocentric tendencies
- Orderliness in working with complexity
- Skills to research, disseminate, and evaluate information
- Negotiation and persuasion skills
- Leadership skills
- Time management, organization, planning, and ability to work under pressure
- Cultural competence
- Library research skills
- Emotional competence
- Responsibility (interpersonal, educational, environmental, etc.)

- 1) 教育学部では、教員採用試験に合格することが重要であるので、覚えてもらうものはしっかり記憶するように指導している。従って、「大学教育で必要とされる専門的な知識」を加える必要がある。
- 2) その他、意見として、今まで大学における専門教育で長年携わってきた立場から言うと、国際教養学部・リベラルアーツ教育で求められる知識（覚えておく必要のある知識）は何であるのかが、よく見えない。専門分野は社会科学、人文科学、特別研究系となっているが、ここで専門知識として何を教育するのかを書く必要があるのではないかと思う。
- 生き方の探求

8/8/2016

Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

6

Informal Rubrics Survey: Appendix B

Reasons Why Faculty Don't Currently Use Rubrics (1 of 2)

- Are there any reasons (such as bad experiences, etc.) for why you do not currently use rubrics?
 - *The institution has never told me what skills they want my students to develop/be trained. Also, rubrics are not supposed to be used for direct grading, so since there is no skill set desired from our students it is pointless to use rubrics in the current state of affairs.*
 - *In AW, I focus on different skills at different times, and don't want to go through the trouble of making different rubrics. Also, I prefer to have a lot more detail in other areas that fall outside of a rubric when giving feedback on writing. That said, the rubrics are perfect for assessing major assignments when precise, detailed feedback is not necessary, such as with final writing assignments or exams.*
 - *Lack of familiarity/experience making/using rubrics.*
 - *When I don't use rubrics, that's because something in my mind has not been systematized yet.*
 - *I think for teachers, rubrics are often instinctive and internalized rather than formal. Using one's own internal sense of student performances has advantages and drawbacks. Formalized rubrics take more time to use in grading students. They also often do not allow for assessment of features of student performance that fall between the items specified in the rubric.*
 - *It is sometimes the case that setting up a rubric based on expectations will surpass the reality of outcomes and make assessment difficult.*
 - *I do use rubrics and I use them frequently. *But* they can be challenging in many ways. For example, I do like to count effort which is difficult to account for in an objective rubric, yet I think taking it into account can be quite crucial for additional growth. A paper that would earn one student a "C" might have enough layers of blood, sweat, and tears encrusting it to earn another student a "B" or even a "B."*
 - *I would like to use rubrics more, but as my teaching assignments change so often, I do not have time to develop rubrics for all aspects of any one course.*

8/8/2016

Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

7

Informal Rubrics Survey: Appendix B

Reasons Why Faculty Don't Currently Use Rubrics (2 of 2)

- ルーブリックの活用方法が分からないから。
- 過去に観点別評価を実施したが、十全には機能しなかったから。
- 教育学部では、学生が卒業するまでに獲得する必要がある素養について、教育目標と成績評価の関連から「ルーブリック的な把握」を行い、学生に指導に利用していく予定である。今までの経験から、プレゼンテーションにおいても利用して来たので、今後とも活用する。意見として、ルーブリックの導入は、しっかりした教育システムの中で考えるべきもので、単に活用する、しないの観点で質問するのは、理解できない。AP事業ではルーブリックシラバスとあるが、国際教養学部シラバスのほとんどが箇条書きになっている。従って、これにどのようにルーブリックを導入する（記載）のか、具体的なイメージがわからない。ルーブリック的な考えは、授業科目や学問分野で入れられる教員が導入すべきものとする。
- 機会が無い

8/8/2016

Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

8

Informal Rubrics Survey: Appendix C

Suggestions for Making Rubric Transition Easier (1 of 2)

- *As for 'making the transition easier,' as mentioned above, first make clear to everyone what rubrics are in the minds of the people who are requiring them to be included in the teaching at MIC. I guess that the people requiring the use of rubrics are Japanese government officials? And where does the "requirement" come from? Is it a (new) law that specifies this and which is now being enacted? If so, does the legal requirement apply to public and private institutions alike? How will it make education at MIC better? How does it connect (or not) with MIC's specific mission? I guess there's a real need for a workshop and some transparency on this . . . Ganbatte with that!*
- *Ask faculty who already use rubrics to share their experiences and the process of rubrics in a FD.*
- *Personally, I think that rubrics can give more detailed feedback for tasks that composite skills, like presentations and essays, but they aren't really necessary for simpler assignments. Because of this, I hope the college doesn't force us to use rubrics just because they've become the latest buzzword. I'm happy to use them when I think they add something to the feedback, but if it just creates extra paperwork for no good reason, then I don't want to use them. It would be helpful to be able to see some sample syllabi with rubrics, even mock syllabi, just to make sure we're all on the same page with this.*
- *Obviously, we all need training in developing good rubrics.*
- *Fall 2015? Who will validate those rubrics? One way to make it easier is to set institutional goals and ask instructors to create rubrics for their classes inside those big categories. This way the administration would be able to see if a student reached expected excellency in each of the institutional goals by averaging (or any other formula) the course goals that are directly mapped to it.*

8/8/2016

Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

9

Informal Rubrics Survey: Appendix C

Suggestions for Making Rubric Transition Easier (2 of 2)

- *Provide FD, examples of best practice, mentoring*
- *I would suggest to inform everyone about this change as soon as possible, hold some workshops and provide opportunities to DISCUSS EXAMPLES. I would personally appreciate feedback. Collaborating with other working groups (e.g. Active Learning and Critical Thinking) would be probably helpful to expand ideas and coordinate the thinking process.*
- *Provide faculty with sample/model rubrics that they could adopt or adapt as they see fit for their specific classes. Hold a workshop to teach faculty members about rubrics (what they are, how they are used, how to design them, best practices, samples, etc.)*
- *Continual changes/upgrades of rubrics should be possible and desirable. Teachers should not have to use rubrics all the time; they can use them just for major assignments/tests, for example; in the language program, only for programwide assessment.*
- *I suggest your committee write up a couple example syllabi with corresponding rubrics as models to use as a template.*
- 実践的研修
- 教育学部は学年進行中で、認可された教育を維持・継続することが求められている。従って、教育学部のシラバスでは、記載されている内容は、変更しないように関係教員に求めている。変更するにしても、教育内容等に影響しないように加筆をお願いしている。
 上述のように、ループリッ的な考えは、学生の理解の程度を知る上で有効である。まずは、導入できるものから始め、さらに全体としてのFD研修会を開催する等、皆さんの理解を促がい、さらにAP事業の年度内を目途に導入を完成する計画を示してほしい。
 使用のためのわかりやすい研修会が必要です。まだ、全く把握していません。

8/8/2016

Report Prepared by MIC AP Rubric-Based Syllabus Working Group

10

(3) クリティカル・シンキングWG

Critical Thinking Working Group (CTWG) 2015 FY Annual Report

1) グループメンバー

The CTWG currently consists of Monica Hamciuc (CTWG leader), Yuko Matsumoto, Benjamin Peters, and Christopher Johnson. Monica Hamciuc (MH) assembled this report based on significant input from the WG members and from the AP Office (indicated where appropriate). In this report I have tried to faithfully represent the work done by the CTWG during the 2015 fiscal year (i.e. up to and including January 31, 2016). Any opinions expressed in this report are my own and not necessarily reflective of those held by the working group as a whole.

2) 日程

April 14& 21. CTWG meets to discuss administration and assessment of CAT in 2015 AY. Benjamin Peters sends CAT workshop report to all MIC faculty.

April 27. Survey is sent to all faculty with a call for volunteers for CAT test assessment sessions

April 28. CTWG meets to discuss results of faculty survey, decide to order additional copies of CAT for summer administration.

July 9 & 21. CTWG meets to organize CAT administration & assessment sessions.

July 31. Spring semester CAT test administration proctored by B. Peters & MH.

Aug. 3. First CAT assessment session led by MH.

Sep. 3. CTWG meets to discuss modifications to budget for trip to TTU, statistical software licenses and CAT assessment.

Sep. 10. Second CAT assessment session led by B. Peters.

Oct. 10. Institutional CAT Report arrives from TTU.

Oct. 14. CTWG meets to welcome new member (Chris Johnson) and confirm schedule for the second half of 2015 & AY 2016. MH becomes leader of CTWG.

Oct. 21. CTWG submits FY 2016 budget proposal at a request from the AP Office.

Oct. 27. CTWG mid-year report prepared by B. Peters is submitted to the AP Office.

Nov. 12. CTWG prepares a call for volunteer students to take the CAT test in Feb. 2016. The message is translated into Japanese and sent to students on Nov. 19.

Nov. 16-19. CTWG prepares an explanatory session (B. Peters), a poster (Y. Matsumoto & C. Johnson) and a CT workshop (MH) for 2015 Active Learning Symposium.

Nov.28. CTWG participates in 2015 Active Learning Symposium.

Dec. 24. CTWG member B. Peters prepares materials for AP homepage update.

Jan. 25. CTWG meets to coordinate schedules to proctor CAT tests and to organize assessment sessions. CTWG members C. Johnson & Y. Matsumoto prepare informal consent (English & Japanese versions) for the CAT test takers.

Feb. 5. CAT test administration proctored by B. Peters.

Prepared by Monica Hamciuc on behalf of the CTWG.

January 31, 2015

3) 活動内容

I. INTRODUCTION

On March 5th and 6th, 2015 two members of the MIC Critical Thinking Working Group, Benjamin Peters and Monica Hamciuc, participated in the Critical Thinking Assessment Test (CAT) train-the-trainer workshop in Boston, MA (USA). Faculty and staff from Tennessee Technological University (TTU) organized and led the two-days workshop with funding from the National Science Foundation.

The first day (7:30am - 4:30pm) was hands-on assessment training. Participants used the CAT assessment rubric to assess and score copies of tests completed by fourth-year undergraduates from U.S. colleges. Skills learned during the session included scoring calibration, rubric usage, and assessment session organization and facilitation. Having completed the hands-on assessment training, Peters and Monciuc are now qualified to administer the CAT and to organize and facilitate assessment sessions at MIC.

On the second day (7:30am - 3:30pm) participants learned about the reliability of the CAT instrument and the kinds of statistical analyses TTU provides to member institutions like MIC. Participants also learned how to develop and implement CAT “analogs” or course activities meant to develop particular critical thinking skills. This training occurred through cross-disciplinary collaboration among small groups of the trainees and presentations to the larger group.

Finally, TTU staff facilitated small group consultations during which they provided research design advice to each participating institution’s representatives. At that time, Peters and Hamciuc explained MIC’s goals related to implementation of the CAT as a component of the Accelerated Program for Rebuilding Higher Education in Japan grant and received advice from TTU staff. In particular, TTU staff advised us on a phased implementation sequence that will help us determine whether and to what degree English language proficiency might interfere with second-language learners’ performance on the CAT.

II. BACKGROUND

There is a shift in education underway from remembering information to:

- Finding relevant information
- Understanding and evaluating information
- Using information effectively

Why assess critical thinking skills?

- Institutions that make claims about emphasizing critical thinking skills need to measure student gains for accountability
- Assessment drives improvement efforts
- How we assess often determines what students learn

How can one test measure critical thinking skills across disciplines?

- The content of the CAT is interdisciplinary.
- CAT questions include content that any student can relate to. For example, some questions are health-related, and most college students give some thought to their health and healthy lifestyles.

III. THE TEST

- The CAT instrument consists of 15 questions with a possible high score of 38 points. The average score for U.S. seniors is 19.5 points, and the average gain over the four years of college is 4.5 points.
- The CAT is assessed using a scoring rubric.
- Students who take CAT at the beginning (pre-test) and end (post-test) of a semester in a class that implements active learning and emphasizes critical thinking can make gains greater than the 4-year average gain in a single semester, in a single course.

- Administering the CAT in individual classes (pre-test/post-test) is useful for assessing gains in critical thinking with intervention (active learning and critical thinking).
- When administering the CAT in a pre-test/post-test sequence, TTU recommends a minimum of 15 matched pairs (same student taking pre-/post-tests).
- Administering the CAT in individual classes may increase students' motivation to do well on the test since it is a course requirement.
- At U.S. institutions, non-native English speakers tend to score lower than native English speakers.

IV. ASSESSMENT

What are the best practices for assessing students' tests?

- At least 6 faculty members should score the tests, but TTU recommends 8-12 scorers.
- Anyone leading a scoring session *does not* score during the session.
- Scorers who are new to the test can assess 6-7 tests in one, all-day scoring session.
- Scorers must calibrate at the beginning of each scoring session. It is not problematic if scorers disagree on the score of an ambiguous answer.
- Score all tests by pencil.
- If a student leaves more than one answer blank, TTU will not evaluate the students' test. MIC scorers should not score them either.
- If a student does not answer the question (even if she wrote an answer), the score for the question is 0 (zero).
- If the scorer cannot understand the answer, the score for the question is 0 (zero).
- At MIC, scorers should keep in mind that we have experience "reading into" students' answers to questions posed in class. When scoring CAT, it is not recommended that scorers "read into" students' answers.
- Use the scoring sessions to generate faculty observations about students' critical thinking skills *and* written communication skills.

- Scorers should aim to assess questions 1-4 before breaking for lunch, questions 5-9 in the early afternoon, and questions 10-15 after an afternoon break.
- All scorers assess the same question *at the same time* and *only one question at a time*. Never assess two questions at once.
- Students may use a paper dictionary while taking the test.
- It is OK to read a question out loud to a student if the student cannot read the question (for example, a visually impaired student).
- *Do not* paraphrase or explain questions to students during the test.
- *Do not translate* any question content for students during the test.
- Involving faculty in scoring is not just an opportunity for Faculty Development, it is also a way for faculty members to improve assessment and student learning in the classroom.
- Compensate faculty for contributing their time for scoring. “*Invest* in areas you want to improve.”
- It is acceptable to allow MIC’s TC students to score a test (after taking it previously). This could be an added professionalization and credentialing experience for them.

V. POST-ASSESSMENT

- It is up to us whether or not we give students their individual scores, but if scores are returned to students, we must give them context for the scores. However, it is not recommended that we go through test results with students and explain each answer and assessment.

How can we use the CAT for Faculty Development?

- The CAT can be used as a model for developing classroom assessment tools that target critical thinking rather than factual knowledge.
- Faculty become familiar with and think more carefully about effective teaching practices *and* appropriate assessments.
- Faculty should consider whether the target skills assessed in each course match the course goals and whether the course activities match the target skills and goals.

- Faculty should use the CAT scoring sessions to a) identify student weaknesses, b) improve course assessment, c) identify instructional strategies for improving critical thinking.

How can CAT have a ‘wash-back’ effect on course design?

- Engage students in active learning as much as possible.
- Learning activities should have ‘real-world’ goals.
- Instructors should create *numerous* opportunities to practice *specific* critical thinking skills in *diverse* contexts.
- Faculty can develop CAT “analogs” for class use. In other words, they can develop discipline-specific activities and assessment that mirror the CAT items.
- As a class activity, have students take and grade a CAT analog. The instructor should create the course-specific analog *and* the assessment rubric that students will use. The instructor guides the students in assessing each other’s answers according to the rubric.
- Always include critical thinking skill items in primary course assessments.
- Develop a scoring rubric (objective evaluation) for critical thinking skill items in primary course assessments.
- List critical thinking component in syllabus. For example: Factual knowledge assessment -- 15% of grade, critical thinking assessment – 50% of grade, etc.
- Faculty should keep in mind the following: a) Students need multiple opportunities to practice specific critical thinking skills, b) Assessment must be appropriate to the skills, c) How students learn helps to determine how they will be able to use knowledge.

VI. LOGISTICS AND TTU EVALUATION

Handling the CAT:

- MIC must send all scoring guides back to TTU *with* the tests. The scoring guides are periodically updated, so MIC will receive new scoring guides the next time we order tests.

TTU services and recommendations:

- TTU can give us an analysis of our students relative to U.S. freshmen and seniors only.
- TTU recommends comparing our student test-takers' results on CAT over time (as cohorts, etc.) rather than comparing them against U.S. college students.
- TTU recommends testing MIC students (beginning with seniors) on the English-only CAT and then correlating scores with TOEIC to determine at what TOEIC level there is possible language interference in test performance.
- TTU will do a scoring check (up to 20 tests) for each scoring session we conduct.
- If we score 20 tests during a session, they will check all 20 tests.
- TTU will provide consultation on our assessment plan at our request.
- TTU recommends focusing on the development of CAT analogs for implementation in upper division courses. Then test for improvements using pre-test/post-test within a course or from 3rd year to 4th year.

IV. 平成 27 年度外部評価委員会

1. 外部評価委員会 日程

宮崎国際大学 第一回大学教育再生加速プログラム（AP）外部評価委員会

- I. 日時 平成 28 年 3 月 30 日 (水曜日) 午後 2 時～午後 5 時
- II. 会場 宮崎国際大学 2 号館 103 号室
- III. 次第 大学教育再生加速プログラム（AP）事業推進代表者挨拶
議題
 1. 外部評価委員会について
 2. 外部評価委員紹介
 - 堀和郎 先生（宮崎太陽銀行非常勤理事、筑波大学名誉教授）
 - 林透 先生（山口大学、大学教育センター 准教授）
 - 藤埴智一 先生（宮崎大学、教育・学生支援センター 准教授）
 - 織田一希 先生（都城西高校教諭）
 - 東田絵里香 さん（宮崎国際大学現 3 年生）
 3. 委員長選出
 4. 平成 27 年度大学教育再生加速プログラム（AP）事業報告
 - 平成 27 年度大学教育再生加速プログラム（AP）概要
 - 平成平成 27 年度大学教育再生加速プログラム（AP）
 5. ワーキンググループ活動報告
 - クリティカル・シンキングWG (Dr. Johnson)
 - e ポートフォリオWG (Dr. Passos)
 - アクティブ・ラーニング WG (Ms. Mork)
 - タブレット PC Sub WG (Ms. Ikeda)
 - ルーブリック・ベースシラバス WG (Mr. Walker)
 - 英語スキル WG (Dr. Thomson)
 6. 外部評価委員による評価
 - 各外部評価委員による評価コメント

2. 外部評価委員会議事録

宮崎国際大学 第一回大学教育再生加速プログラム（AP）外部評価委員会 議事録

- 日時 平成 28 年 3 月 30 日(水曜日)午後 2 時～午後 5 時 15 分
- 会場 宮崎国際大学 2 号館 103 号室
- 本学出席者：永田学長、トンプソン国際教養学部部長、ウォーカー学部長補佐（進行役）パッソス准教授、ジョンソン講師、モーク講師、池田 A P 事務補佐員

会議は午後 2:00 に進行役の開始宣言をもって始まり、
大学教育再生加速プログラム（AP）事業推進代表者（永田学長）が挨拶を行った。

議題

1. 外部評価委員会について

- 宮崎国際大学外部評価委員会規程について説明

2. 外部評価委員紹介

- 堀和郎先生（宮崎太陽銀行非常勤理事、筑波大学名誉教授、教育行政学専門）
- 林透先生（山口大学、大学教育センター 准教授、A P 事業担当）
- 藤埴智一 先生（宮崎大学、教育・学生支援センター 准教授、アクティブラーニング導入担当）
- 織田一希 先生（都城西高校教諭、宮崎国際大学 7 期卒業生）
- 東田絵里香 さん（宮崎国際大学現 3 年生）

3. 委員長選出

- 堀委員が委員長に立候補し、他の委員により承認された。委員長選出に伴い、この議題以降の議長を堀委員が務めた。

4. 平成 27 年度大学教育再生加速プログラム（AP）事業報告

- 平成 27 年度大学教育再生加速プログラム（AP）概要

本学国際教養学部、学部長であり A P 事業のワーキンググループの統括責任者であるトンプソンより平成 27 年度の A P 事業の概要についてレポート〔添付書類 2〕に沿って説明した。

平成27年度のAP事業の三つの目標としてとして、アクティブラーニングの可視化、クリティカル・シンキング評価テスト〔以下CAT〕の試行、eポートフォリオグループの構築があったことが述べられ、5つのワーキンググループがその目標に向けて行った活動が説明された。

- ウォーカー学部長補佐より補足：

ワーキンググループは国際教養、教育学部の教員で構成されているが、教育学部は設立2年目であり、カリキュラムに柔軟性がないためAP事業への対応が難しかったが、平成28年度に新しいアセスメントオフィサーを迎えることで、さらなる対応を目指す。

5. 平成27年度大学教育再生加速プログラム・ワーキンググループ活動報告

- クリティカル・シンキングWG（ジョンソン講師）

クリティカル・シンキングは本学のリベラルアーツ教育の要として長年にわたり行われてきた。しかし、その成果を評価することができなければ意味がない。WGはAP事業によりその評価ツールを検討する機会を得た。具体的にはテネシー工科大学（以下TTU）のCATワークショップへの教員4名の派遣、CATテストの本学での3回の実施とその分析がそれであった。3回のテストで明確になったことは、コミュニケーション能力に関連が深い質問になるほど学生のスコアが低くなることで、それは英語の能力との関連性につながることであった。この結果を踏まえて、ワーキンググループでは今後、日本語でのMIC独自のCAT作成を目指す。

- eポートフォリオWG（パソス準教授）

eポートフォリオとは何であるかという理解を教職員に行うことから始まった活動は困難であったが、4月から9月のあいだに教職員にFDを行うと同時に個人サーバーでテストを行い、業者選定しeポートフォリオシステムを構築した。9月より教員および学生に向けてオリエンテーションを行ったほか、授業の中にeポートフォリオを組み込んで、日誌機能による授業の振り返り、仮想ワッペンを活用による奨励などを行う試みも行われ、その結果を九州地区の情報学会で発表した。

e ポートフォリオは、アクティブラーニング、クリティカルシンキング、英語スキル、ルーブリック活用などAP事業のすべての側面を支えるツールであることが明らかとなった。

ウォーカー学長補佐より補足：来学期はIT入門とリベラルアーツ入門の授業にeポートフォリオが本格的に組み込まれる。

- **アクティブ・ラーニング WG (モーク講師)**

宮崎国際大ではアクティブ・ラーニングが長年にわたり行われてきたが、それを可視化するためにデータ収集を行うことは最初の試みで難しさがあった。ワーキンググループはまずは授業参観とそのフォローアップの教員との面談によりアクティブ・ラーニングの手法を集め、それを指標ALTS(Active Learning Teaching Strategies)としてまとめた。さらには、それを分類してマトリックス化した。この結果は11月のアクティブ・ラーニングシンポジウムで発表された。データの収集量がまだ少ないので、今後は教員の自己入力ができるような仕組みを構築し、さらなるデータ収集を試みる。また、アクティブラーニングとクリティカル・シンキングの関連性も見出して行きたい。

- **ルーブリック・ベースシラバス WG (ウォーカー学長補佐)**

教員へのアンケート調査をもとに大学全体のルーブリック Institutional Rubrics を作成した。その目的は、教員と学生に重要であると思われる項目の達成を意識してもらうことにある。FD活動によりルーブリックの理解を深め、今学期よりすべてのシラバスにルーブリックが導入された。ただし、ルーブリックをどこまで授業に取り込むかは教員の選択になっている。次のステップは学生のルーブリックの理解度とその結果を調査することにある。その一端として行った卒業生へのアンケートでは、クリティカル・シンキングやアクティブ・ラーニングが4年間で身についたことが読み取れる。

- **英語スキル WG (トンプソン国際教養学部長)**

英語科の教員の活動がすべて英語スキルの向上に関係しているので、APのワーキング・グループとして活動ではなく、英語科として他のワーキング・グループの

活動に関連しながら英語スキルの向上を研究している。英語科では英語力の向上に関するデータを収集している。

- タブレット PC Sub WG (池田事務補佐員)

タブレット PC を平成 26 年度に 60 台、平成 27 年度に 100 台購入し、クラスごとの貸し出し、新入生および 2 年生の希望者に貸与を行った。教員にはアクティブ・ラーニングに活用することを促し、教員に活用しているアプリやソフトおよびサイトのリストに入力をしてもらい共有した。さらには年度末に、学生および教員にタブレット活用アンケート調査を行った。

6. 外部評価委員による評価

- 学生の立場から委員会出席して、はじめて大学が AP 事業に力を入れていたことに気がついた。他の学生も認知していないと考える。AP 事業をもっと学生に知らせるべきである。また、e ポートフォリオについてはオリエンテーションを 4 回受けたが、実際に使う機会がなかったので習得できなかった。他の学生への浸透度も低いと考える。
- 高校でも 3 年ぐらい前から文部科学省の要望でアクティブ・ラーニングの試みがはじまっており、ひとつひとつの授業で取り組まれている。大学ではさらに双方向の授業が可能なのでアクティブ・ラーニングをさらに推し進めることができると考える。特にタブレット PC や e ポートフォリオ導入を徹底的に行うことがポイントではないかと考える。
- 短期間のあいだに幅広く、急速に事業が進められていると考える。他大学ではまだ用語の理解のレベルであるクリティカル・シンキング能力をすでに教えているところが宮崎国際大学の強みである。しかし、これを対外的に広めていないところが残念であり、今後はそれを広めてほしい。
- 調査訪問に続く 2 回目の訪問となったが、すばらしい取組だと考える。他大学と相違するのは、すでにアクティブ・ラーニングを行っている点である。海外の大学を参考にできる点が強みであるが、これを、日本で外に発信していくべきである。また Institutional Rubric の作成も評価できるが、今後これを形骸化させず、教員の認識、学生の理解を深めていくべきである。タブレットの導入についても、宮崎国際大学の強みが失われないような形で進めていってもらいたい。

- 日本の多くの大学が学生に何を望むのかを明確にしていなかった中で、それを枠組みとして組織化しようとするのは、すばらしい試みと考える。ワーキング・グループは相互に連携して活動を進めたほうがよく、その役割を明確にしたほうがより効果的になると考える。特にアクティブ・ラーニングの手法がどのようにクリティカル・シンキング能力を高めていくかを解明するのが今後の課題である。eポートフォリオ・システムはその手段となるものであり、今後の本格的実施に期待する。

会議は午後 5:15 に終了しました。

3. 外部評価委員長の総括

宮崎国際大学 平成 27 年度第一回大学教育再生加速プログラム (AP)
外部評価委員会によるまとめ

28 年 8 月 5 日
(委員長) 堀 和郎

日時 平成 28 年 3 月 30 日 (水曜日) 午後 2 時～午後 5 時 15 分
会場 宮崎国際大学 2 号館 103 号室

1. クリティカル・シンキング WG

長年の実践の蓄積のあるクリティカル・シンキング(CT)の能力の育成に関して、テネシー工科大学の CAT の導入により CT の客観的測定を行うとする取り組みは興味深く、また、国際大学独自の CAT 開発への志向があることも評価できる。それはこの取り組みは大学が進めてきたアクティブラーニングの効果を把握するための不可欠の取り組みのひとつであるためであるが、いくつかの課題が残されている。たとえば、CT の伸長を促す授業の在り方はどういうものか、それに関する教員の共通理解は進んでいるのか、また、それがアクティブラーニングというものであるとすれば、それはなにゆえに、またどのようにして CT の育成を促進するのか、これらの解明は今後の検討課題である。さらに、学生の母国語・英語力に影響されない CAT の開発は時間のかかる作業であることが予想される。

2. e ポートフォリオ WG

e ポートフォリオシステムは教員への教育支援、学生への学習支援の意味を持つアクティブラーニング推進のインフラに相当するものであり、その全学的な整備は AP 事業成功の基盤となるものであるだけに、それを構築し、その試験的運用を開始したことは評価できる。しかし、このシステムに伴うタブレット PC の導入と活用については大きな成果が上がっていないように見受けられる。今後は、その本格実施と、そのシステムに関する教員・学生への周知の徹底とその活用に関する理解の共有を図る必要がある。

3. アクティブ・ラーニング WG

長年にわたり行われてきたアクティブラーニング(AL)の実践を踏まえ、授業参観とそのフォローアップ教員との面談によりそれを可視化するためのデータ収集により、ALのための教授方略(teaching strategies)の類型化を試み、推奨されるべき実践(preferred practices)を提案している、つまり、実践事例集から帰納的に効果的なALの手法を抽出しようとしていることは評価できる。これは、学生として豊富なALの経験を持つ外国人教員の多い宮崎国際大学のリソースを有効に活用したものであり、その成果は大いに期待される。しかし、一方で、教員全体としてのALへの自覚と認識をどう高めるか、あるいは技量の向上をどう図っていくかが課題となる。つまり、ALを組み込む手法は授業の内容により大きく異なる可能性があり、その効果は教員の力量により大きな差が生じることは否定できない。そうした問題をどう克服するか、その手立てを検討する必要があるだろう。どんな教員でもALに積極的かつ効果的に取り組むことのできるような教育支援の仕組みを大学全体として整備することが重要になると思われる。

4. ルーブリック・ベース・シラバス WG

全授業で共通に使える機関ベースのルーブリックを作成し、全授業科目のシラバスに掲載することにより、達成すべき重要な学習成果の可視化を推進しようとする取り組みは画期的であり評価できる。ただし、各教員の授業実践においてそれがどれだけ活用されるのか、つまり、機関ベースのルーブリックが形骸化しないよう、ルーブリック・シラバスの活用に対する教員の自覚と認識を全学的に高めることも忘れてはならない。

5. 英語スキル WG

英語科の教員の活動がすべて英語スキルの向上に関係しているため、APのワーキング・グループとしての活動ではなく、英語科として他のワーキング・グループの活動と関連しながら英語スキルの向上を検討しており、英語科として英語力の向上にかかわるデータの収集を継続的に行っている

6. 総括

宮崎国際大学の AP 事業への取り組みは、大学 20 年の歴史と伝統の上に、それを生かしつつ推進されている。英語圏の高等教育を受け、学生として豊富なアクティブラーニングの経験をもち、クリティカルシンキング(CT)について訓練を受けてきた外国人教員が多いという組織上の利点をリソースとしつつ、アクティブラーニング主体の授業とそれに伴うクリティカルシンキングの育成に力を注いできた実績を土台としながら、AP 事業に取り組んでいる。しかし一方で、教員、学生、スタッフの間で AP 事業に対する共通認識が形成されているかといえ、それは十分とは言えない。アクティブラーニングの授業への組み入れに関して教員間での差や、タブレット PC の活用に関する教員、学生の間での認識の違いがみられる。AP 事業の狙いに関する理解と認識を共有し、大学が一体となって取り組むための広報活動も併せて推進していく必要がある。特に、開学以来の伝統にねざした宮崎国際大学独自の新しいアクティブラーニングの開発とクリティカルシンキングの育成という目標をキャンパス全体で共有し、広く社会にアピールする必要がある。各ワーキンググループはそれぞれの課題に基づいて活動しているが、今後、ワーキンググループ相互の連携・交流を推進し、その有機的な結びつきを強化する必要がある。ワーキンググループの間で課題の重複があり、ワーキンググループ間の構造的関係性を明確にすることが事業目標の達成に不可欠と思われる。たとえば、どのようなアクティブラーニングがクリティカルシンキングを促進するのか、また、そのメカニズムはどうなっているのかという課題の解明は今後の検討課題のひとつであるが、アクティブラーニングとクリティカルシンキングのどちらのワーキンググループにもかかわる課題である。

最後に、外部評価委員会の持ち方に改善が必要である。外部評価は実施体制の構造の上から見て、内部評価委員会による評価を受けて行われるもので、まとめられた事業評価報告書を前提として、その事前配布を受けた外部委員が個々に書面審査を行い、それをヒアリング審査で補充しながら、最終的な外部評価報告書をまとめるという流れで行われる。委員が一堂に会して開催される外部評価委員会は事実上、ヒアリング審査の形をとるのが効果的と思われる。今回は、(日程上、やむ負えない事情があったことは理解できるが) 事業報告を聞いたその場で質疑を行う点で、しかも英語での報告であった点で、外部評価委員にとって適切な理解と評価が困難な面があったことは否めない。次回はぜひとも、英語・日本語双方の報告書の作成、委員への事前配布＝事前の書面審査、委員会当日のヒアリング審査という流れを実現してほしい。

V. AP 事業と宮崎国際大学の展望

The AP program and Miyazaki International College

宮崎国際大学 国際教養学部 学部長 マイケル・トンプソン



The AP grant offers the opportunity for a major movement forward in the implementation of our Liberal Arts program and of our Education program. This is not an accidental movement but one that is based on solid foundations reaching back to the very beginnings of Miyazaki International College (MIC). The AP program at MIC has from its inception been faculty driven because the idea of applying for an AP grant was based around faculty interests, research, and publications. Critical Thinking and Active Learning have always been at the center of MIC for its more than twenty years existence. Active Learning and the Visualization of Learning Outcomes are the concrete goals of our AP grant and the mirror the theory and practice of the college. The AP grant has given us the opportunity to begin to evaluate this theory and practice in terms both of our methods and of our student achievements in concrete, quantifiable ways.

In 2015-2016 faculty have actively participated in the implementation of the AP grant alongside the students. The AP grant has allowed MIC to introduce college wide rubrics and has fostered course specific rubrics through surveys and training sessions. The use of tablet computers by all incoming students was made possible by the AP grant and all students are trained in Moodle applications and the creation of their individual e-Portfolios. Needless to say, both the Active Learning Working Group (ALWG) and the Critical Thinking Working Group (CTWG) have been equally active. Surveying faculty and student practices, training sessions to share ideas and practices and creation of possible templates for future practice based on these have been features. The CTWG has the concrete task of creating a critical thinking test mechanism, which can provide solid evaluative material on critical thinking at MIC and can then be used to improve it. It has been a busy year but a profitable one. We still have a way to go to fully realize our goals, in many ways it will always be an ongoing project, but we have made solid progress and have clear plans for more progress yet to come.

VI. 参考資料

1. Newsletter (英語版)



CONTENTS

- 2015-2016 Project Summary ● Active Learning Symposium
- Working Group Highlight : Introduction of e-Portfolio system

Issued by the e-Portfolio Center
Miyazaki International College
1405 Kano, Kiyotake,
Miyazaki 889-1605, Japan

2015-2016 Project Summary

The Acceleration Program for University Education Rebuilding (AP) project (Theme I and II) at MIC is now in its second year. This year the working groups of the project further widened the scope of their research and activities to develop the foundations for visualization of learning outcomes. In the first semester, tablet PCs were issued to all freshmen and an e-Portfolio system was installed. e-Portfolio orientations, introduction of the rubric-based syllabus and administration of CAT tests were some of the activities of the second semester. In November, MIC held the Active Learning Symposium, providing the institution a great opportunity to share the activities and research results of all the working groups of the project with educators of other schools and other members of MIC.

What is "Active Learning" ?

"Active Learning" is defined in the glossary published by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology as follows: "It refers to all kinds of teaching and learning methods that incorporate active participation in learning by learners, which are different from the type of education conducted through one-way lecturing by teachers. Development of versatile abilities such as cognitive, ethical and social ability, and gaining culture, knowledge and experience is sought by active participate in learning by learners. It includes discovery learning, problem solving, experiential learning and exploratory learning. Inside classroom activities such as group discussion, debate and group work are also effective active learning methods." The Active Learning Working Group of MIC also refers to the definition provided by Bonwell and Eison (1991): "instructional activities involving students in doing things and thinking about what they are doing."

ACTIVE LEARNING SYMPOSIUM

Active Learning Documentation: The Way Forward Developing Critical Thinking through Active Learning

Our first Active Learning Symposium was held on November 28th at MIC. The event brought together university faculty and staff and high school and middle school teachers that share an interest in active learning. The symposium began with welcome greetings from MIC President, Dr. Masateru Nagata, followed by a speech on the meaning of this symposium by Dr. Benjamin Peters. Dr. Anne Howard and Lecturer Cathrine Mork gave a presentation entitled "Active Learning Documentation: The Way Forward". This presentation summarized the work of the Active Learning working group formed to enhance and to conduct research on active learning at MIC as a part of the AP project. Dr. Howard and Ms. Mork presented their analysis of active learning methods collected via questionnaire, class observations and interviews with faculty. They described the matrix that divides methods into four quadrants, thus clarifying the characteristics of active learning methods at MIC.



In the afternoon session, Dr. Gregory Dunne and Dr. Benjamin Peters gave presentations entitled "Developing Critical Thinking through Active Learning". The presentations introduced the critical thinking assessment test (CAT) developed by Tennessee Technical Institute (TTU) that were administered to MIC students as a part of the AP project. They also introduced how critical thinking can be developed in particular fields of study through methods also developed by TTU. After the presentation, the audience was encouraged to participate in one of three active learning workshops: "Active learning and tablet PCs" run by Dr. Jenice Lusk, "Active learning and critical thinking" run by Lecturer Monica Hamciuc and "Active learning and the e-portfolio" run by Dr. Debra Occhi. Participants learned how active learning can be enhanced by use of tablet PCs, critical thinking methods, and the e-portfolio system through the workshop.

Working Group Activity Highlights: e-Portfolio Introduction to MIC

Background :

The School of International Liberal Arts of MIC has been using the open-source LMS: Moodle since 2005. The open source e-Portfolio system Mahara was chosen to introduce the e-Portfolio to MIC as a part of the AP grant as it can be easily linked with Moodle. With the Moodle system, reflective learning as well as visualization of learning outcomes became possible.

Orientation :

A series of faculty orientation sessions for Moodle and Mahara were conducted to instruct faculty on how to use the new system and how each function can be used in their classes. This was followed by orientation for freshmen in the School of International Liberal Arts who received tablet PCs through the AP project. Then orientations were expanded to upper classmen and students in the School of Education. Students were asked to upload their files and create and submit their e-portfolio pages using Mahara.



Class Performance Evaluation

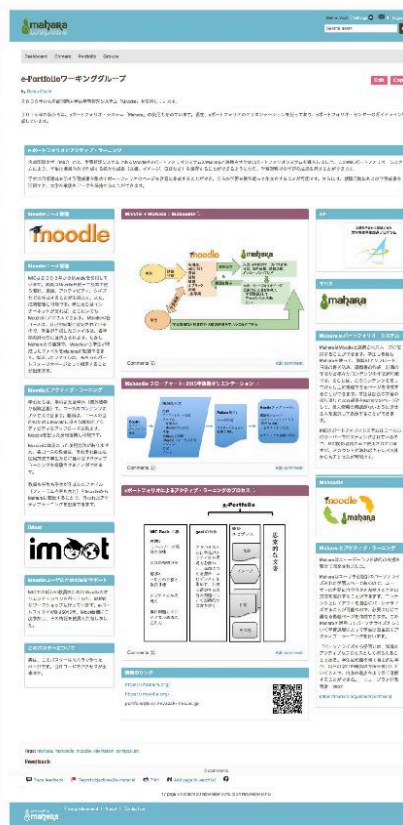


Student's name	1st	2nd	3rd	4th	5th
Student's name	75	78	80	82	85

In the Classroom: Information Technology & Environmental Issues:

As students recorded their learning outcomes by using the e-Portfolio system's journal function, they were encouraged to reflect on their learning. Students also submitted assignments and homework to the system for classes where instructors used rubrics for grading. Giving virtual badges to reward and encourage students' work and evaluating students with ladder charts also became possible with use of the e-portfolio System.

Mahara generated PAGE by the e-Portfolio Working Group



2015-2016 AP Activities

- April** Establishment of the e-Portfolio Center.
- June** Tablet PCs issued to the freshmen class.
- July** Establishment of the e-Portfolio system.
Administration of the TTU CAT test.
- Aug.** Faculty participation in CAT workshops in the US.
- Sep.** FD seminar to introduce Rubrics.
e-Portfolio orientation for faculty.
- Oct.** Commencement of e-Portfolio orientation for students.
- Nov.** The 1st Active Learning Symposium.
- Feb.** Administration of the TTU CAT test.
- March** FD seminar for orientation to the rubric-based syllabus.

2016-2017 AP Plan

- April** Institution-wide introduction of the rubric-based syllabus
e-Portfolio orientation for faculty
e-Portfolio orientation for students
- May** Tablet PC orientation
Active learning FD
- June** Development of MIC Critical Thinking Assessment Test (MIC-CAT) starts
- Oct.** MIC-CAT pilot administration
- Nov.** The 2nd Active Learning Symposium
- Jan.** Assessment on outcome of working group activities

(日本語版)



宮崎国際大学
Miyazaki International College



大学教育再生加速プログラム

MIC-AP NEWSLETTER

Newsletter of MIC-AP

平成27年度 March, 2016

CONTENTS

- 今年度事業の概要 ● アクティブ・ラーニング シンポジウム
- ワーキンググループ活動ハイライト: e-ポートフォリオの導入

発行: 宮崎国際大学 e-ポートフォリオセンター
〒889-1805 宮崎県宮崎市清武町加納丙1405番地
TEL.0985-85-5931(代) FAX.0985-84-3396
URL: <http://www.mic.ac.jp/>

平成27年度事業の概要

平成26年度に大学改革推進事業「大学教育再生加速プログラム(AP)」において、テーマⅠ・Ⅱの取組みとして採択された本学のAP事業は、2年目を向かえました。今年度は各ワーキンググループが、昨年度に取組み始めた活動や研究の幅を広げて、アクティブ・ラーニングの成果の可視化の足がかりとしました。また新入生全員向けにタブレットが貸出され、同時にe-ポートフォリオ・システムが構築されました。9月にはe-ポートフォリオのオリエンテーション、ルーブリックのシラバス導入の試み、クリティカル・シンキングのテストの試験的施行などが展開されました。そして、その総まとめとも言えるアクティブ・ラーニング シンポジウムを11月に開催し、アクティブ・ラーニングを中心とするこれまでの各ワーキンググループの研究結果を学内外と共有する機会としました。

「アクティブ・ラーニング」とは？

文部科学省の用語集では「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」とあります。本学アクティブ・ラーニング・ワーキンググループでは、ボンウェルとエイソン(1991)による「学生たちが何が行うこと、何かについて考えることを促す教授法」という定義も参考にしています。

アクティブ・ラーニング シンポジウムの開催

「アクティブ・ラーニング(AL)の可視化: 将来への展望」

「アクティブ・ラーニングによるクリティカル・シンキング能力開発」

11月28日(土)「2015 アクティブ・ラーニングシンポジウム」が開催され、大学教職員、高等学校や中学校の教員など県内外から多数の関係者が参加しました。

今回のシンポジウムは、永田学長の開会の挨拶から始まり、次にベンジャミン・ピーターズ副学長がその意義について述べました。それに引き続き、アン・ハワード准教授とカタリーナ・モーク講師から、「アクティブ・ラーニングの可視化: 将来への展望」と題した発表がありました。この発表は、AP事業を推進するアクティブ・ラーニング・ワーキンググループのこれまでの研究活動を総括するもので、同グループが行った教員へのアンケート調査、授業参観、面接をもとに集積されたアクティブ・ラーニングの教授法を、4分割されたマトリックス図に配置することで、その特性を可視化する手法が紹介されました。



午後のセッションでは、グレゴリー・ダン教授とベンジャミン・ピーターズ教授から、「アクティブ・ラーニングによるクリティカル・シンキング能力の開発」について発表があり、本学で使われているテネシー工科大学が開発したクリティカル・シンキング能力テスト(CAT)の紹介がありました。また、このテストの評価内容を応用した、特定の専門分野におけるクリティカル・シンキング能力を高めるアクティブ・ラーニングの指導法の一部も紹介されました。その後、アクティブ・ラーニングに関する3つのワークショップ、「アクティブ・ラーニングとタブレットPC」(担当: ジェニース・ラスク准教授)、「アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング」(担当: モニカ・ハムチュック講師)、「アクティブ・ラーニングとe-ポートフォリオ」(担当: デボラ・オチ教授)が並行して開催され、来場者は各自の興味に従い、3つに分かれてそれぞれのワークショップを体験しました。

ワーキンググループ活動ハイライト：eポートフォリオの導入

導入背景：

本学国際教養学部では2005年よりオープンソースの学習管理システムであるMoodleを活用していました。今回、AP事業によりeポートフォリオシステムを導入するにあたり、このMoodleと連携でき、同様にオープンソースあるeポートフォリオシステムのMaharaを導入しました。これにより、学習の振り返りおよび学修成果の可視化が可能となりました。

導入オリエンテーション：

導入にあたって、まず教員向けにMoodleおよびMaharaの使用法についてのオリエンテーションが行われました。これに続きタブレットPCの貸与とプログラムを行っている国際教養学部1年生向けにオリエンテーションが数回にわたり行われ、次に2年生、そして教育学部生へと広がられました。学生向けのオリエンテーションは、Maharaの使用法を学ぶために学生にファイルをアップロードさせ、それをもとにWeb上に学生の個人のMaharaページを作成させ、Webアドレスを提出させることを目標としました。

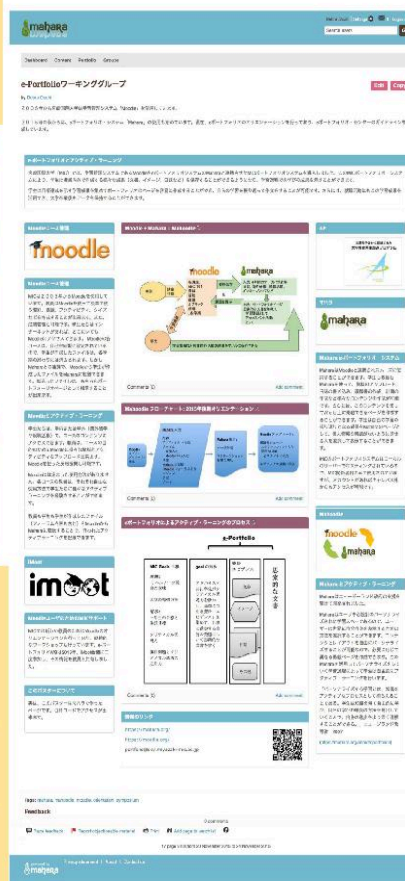


Class Performance Evaluation



クラスでの活用：情報技術特論
eポートフォリオシステムMaharaの日記機能を利用して学生は授業内外での学習成果を効率的に記録することができ、結果として学習への取組みが高められました。また学生は課題や宿題をこのシステムを通して提出し、教員がルーブリック（採点基準）に従ってそれらを評価しました。さらには仮想バッジのオンライン賞与による向上心の促進、レーダーチャートによる学生の取組みの評価などをeポートフォリオと組み合わせるなど、eポートフォリオシステムの効果的な活用法が試みられました。

Maharaを活用して作成された ワーキンググループのページ



平成27年度の主な活動

- 4月 eポートフォリオセンターを設置
- 6月 タブレット端末の貸与を開始
- 7月 eポートフォリオシステムを構築
CATの試験的テストを実施
- 8月 米国でのCAT研修に参加
- 9月 ルーブリック導入オリエンテーションFD開催
eポートフォリオ導入オリエンテーションFD開催
- 10月 学生向けeポートフォリオのオリエンテーション開始
- 11月 第1回アクティブラーニング・シンポジウム開催
- 2月 CATの試験的テストを実施
- 3月 ルーブリック・ベース・シラバスFD開催

平成28年度の主な活動予定

- 4月 ルーブリック・ベース・シラバスの運用を開始
教員向けeポートフォリオ オリエンテーション実施
新入生向けeポートフォリオ オリエンテーション開始
- 5月 タブレット端末の貸与を開始
アクティブ・ラーニングのFD開催
- 6月 MICクリティカル・シンキング・アセスメントテスト
(CAT) 開発開始
- 10月 MICCATの試験的運用開始
- 11月 第2回アクティブ・ラーニング・シンポジウム開催
- 1月～ 各ワーキンググループ活動の成果分析の実施

2. 宮崎国際大学 AP プロジェクト・メンバー

- アクティブ・ラーニング WG
 - Gregory Dunne (Group Leader)
 - Anne Howard
 - Cathrine Mork
 - Aya Kasai
 - Haruko Aito

- e ポートフォリオ WG
 - Debra Occhi (Group Leader)
 - Anderson Passos
 - Yukichi Shimizu
 - Adam Murray
 - Mai Sakakura

- ルーブリック・ベース・シラバス WG
 - Jeniece Lusk (Group Leader)
 - Katherine Bishop
 - Lloyd Walker
 - Koji Watanabe

- クリティカル・シンキング WG
 - Christopher Johnson (Group Leader)
 - Benjamin Peters
 - Yuko Matsumoto
 - James Furse

- e ポートフォリオセンター
 - Satoshi Ozeki
 - Masae Nishinaka

- 宮崎国際大学・AP 事業推進者
 - Masateru Nagata (President)
 - Naoki Nishimura (AP Project Leader)
 - Benjamin Peters (Vice President)
 - Micheal Thompson (Dean: School of International Liberal Arts)
 - Nobuhiro Fukuda (Dean: School of Education)
 - Lloyd Walker (Manager of Academic Affairs)

平成 27 年度報告書
大学教育再生加速プログラム (AP)
[テーマⅠ・Ⅱ複合型]

発行

宮崎国際大学 e ポートフォリオセンター
〒889-1605 宮崎県宮崎市清武町加納丙 1405 番地
TEL : 0985-85-5931

本書に記載された記事の無断転載・複製を禁じます